

高 萩 遺 跡

—経営体育成基盤整備事業(大日川東Ⅱ期地区2・4工区工事)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会

はじめに

淡路島で最も南に位置する南あわじ市は、野の幸・山の幸・海の幸に恵まれた自然豊かな地域です。島内で最も広い平野部をもつ三原平野^{みはら}を中心に、温暖な気候を利用した三毛作の農業、酪農や肉牛飼育をはじめとする畜産が盛んに行われ、周囲を囲む海からは多種多様で新鮮な海産物を得ることができません。

古代において淡路島は「御食国^{みけつくに}」と呼ばれ、天皇が食を求めた重要な場所でした。食料自給率が下がりに続ける現在、「御食国」としての南あわじ市の果たす役割は、古代よりなお一層大きなものとなりつつあります。

この南あわじ市の更なる農業生産性の向上のためには、圃場整備事業は必要不可欠な事業と言えるでしょう。平成に入ってから大規模な圃場整備事業が次々と展開し、それに伴う発掘調査についても激増する事となりました。今回報告を行う高萩遺跡の発掘調査もその一例です。

開発事業を展開していく立場と文化財を守っていく立場、この二者は一見相反する立場のように見えますが、次の世代へ誇り得るふるさとを残したいという思いは全く同じであります。今後は事業の急速な展開に比べ、等閑となりがちであった発掘調査成果の公開事業にも力を注いでいかなければなりません。報告書の刊行はその第一歩であり、ふるさと南あわじ市の歴史を知るための基礎資料として大いに活用されることを願っております。

まだまだ調査成果の公開が不十分な状況ではありますが、今後も生涯学習・文化振興活動の一環として、郷土の歴史や文化を学ぶための環境づくりをすすめ、文化財保護の更なる理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、御指導御協力いただいた方々に対し、心よりお礼申し上げます。

平成23年3月31日

南あわじ市教育委員会
教育長 塚本圭右

例 言

1. 本書は、兵庫県南あわじ市^{かしゅうふくい}賀集福井に所在する、高萩^{たかはぎ}遺跡の発掘調査報告書である。
2. 経営体育成基盤整備事業（大日川東Ⅱ期地区2・4工区工事）に伴い、兵庫県淡路県民局の依頼を受け、平成17年度に南あわじ市教育委員会が本発掘調査を実施した。
3. 本発掘調査は、南あわじ市教育委員会（南あわじ市埋蔵文化財調査事務所）の山崎裕司・谷口梢（現丸亀市教育委員会）が担当した。
4. 発掘調査時の写真撮影は山崎・谷口が、平面・層序図等の実測作業は山崎・谷口の指示を受けて宇治田力・筒井健司・濱本善美が中心に行った。実測図のデジタルトレースは豊田亜希子・宇治田・白川裕二が行った。遺構の掘削作業等は、南あわじ市シルバー人材センターに委託した。
5. 出土遺物の整理作業については第1章に記す通りであるが、遺物の実測作業については谷口・山崎が、遺物実測図のデジタルトレースは豊田・宇治田・白川が、遺物の写真撮影は山崎が行った。
6. 本書の執筆は、第4章が坂口弘貢、他は山崎が行った。編集は山崎が行った。
7. 当調査に関わる遺物、写真、実測図面等の資料は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所において保管している。
8. 発掘調査にあたり、兵庫県淡路県民局洲本土地改良事務所、兵庫県教育委員会、南あわじ市シルバー人材センターの諸機関、また区長をはじめとする高萩地区の皆様から御協力や御指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。
9. 凡例は下に示す通りである。
 - ・本書に記される標高は東京湾平均海水準を基本とする。
 - ・各調査区の平面図の方位は磁北を示す。
 - ・層序図の色調は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究会監修）を参照した。
 - ・遺構番号は調査時、調査区毎に遺構の種類によらず1から通し番号を付したものをそのまま使っており、本書では報告・編集上必要な番号以外は割愛した。性格が明らかでないものは遺構+番号としたが、可能な限り柱穴・土坑等の言葉に改めた。C-1・2地区で復元した建物・柵列についてはさらに1～4・1～9の番号を付した。
 - ・本書収録の遺物は、ゴシック体で通し番号を付した。
 - ・土器実測図の断面は、土師器が白色、輸入および国産陶磁器・瓦器が灰色、須恵器が黒色とし、縮尺は1/4とした。
 - ・出土古銭の拓本の縮尺は1/2とした。ただし82・83・117・120・122の古銭については、状態が非常に悪いため、拓本は取らず写真図版のみの掲載とした

本文目次

はじめに

例言

第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査成果	
第1節 A地区	8
第2節 B地区	10
第3節 C-1地区	14
第4節 C-2地区	22
第4章 高萩地区の水利調査	31
第5章 総括	
第1節 中世	33
第2節 弥生時代	38

挿図目次

図1 調査区設定図 (S=1/3,000)	2	図18 C-1地区 建物1平面・断面図 (S=1/100)	16
図2 南あわじ市の位置	3		
図3 淡路島南部の地形と調査地の位置 (S=1/200,000)	4	図19 C-1地区 土坑15遺物出土状況平面・ 層序図 (S=1/40)	17
図4 調査地周辺の遺跡 (S=1/25,000)	6・7	図20 C-1地区 建物2平面・断面図 (S=1/100)	17
図5 A地区の位置 (S=1/5,000)	8		
図6 A地区 遺構13出土中世土器 (S=1/4)	8	図21 C-1地区 遺構出土中世土器 (S=1/4)	19
図7 確認調査区No.60 出土中世土器 (S=1/4)・ 平面図 (S=1/50)	8	図22 C-1地区 包含層出土中世土器 (S=1/4)	21
図8 A地区 南東壁層序図 (S=1/50)	9	図23 C-1地区 遺構259出土古銭 (S=1/2)	21
図9 A地区 平面図 (S=1/100)	9	図24 C-1地区 出土弥生土器 (S=1/4)	21
図10 B地区の位置 (S=1/5,000)	10	図25 C-2地区の位置 (S=1/5,000)	22
図11 B地区 南東壁層序図 (S=1/50)	10	図26 C-2地区 南西・南東壁層序図 (水平方向S=1/200、鉛直方向S=1/40)	22
図12 B地区 平面図・遺構層序図 (S=1/50)	11	図27 C-2地区 平面図 (S=1/200)	23
図13 B地区 遺構出土弥生土器 (S=1/4)	13	図28 C-2地区 遺構18遺物出土状況平面・ 断面図 (S=1/4)	23
図14 B地区 包含層出土弥生土器 (S=1/4)	13		
図15 C-1地区の位置 (S=1/5,000)	14	図29 C-2地区 建物3平面・断面図 (S=1/100)	24
図16 C-1地区 北西・北東壁層序図 (水平方向S=1/200、鉛直方向S=1/40)	14		
図17 C-1地区 平面図 (S=1/200)	15	図30 C-2地区 建物4平面・断面図 (S=1/100)	24

図31 C-2地区 流路72遺物出土状況平面・断面図 (S=1/10) ……………	25
図32 C-2地区 遺構出土中世土器 (S=1/4)・古銭 (S=1/2) ……………	27

図33 C-2地区 包含層出土中世土器 (S=1/4) ……	28
図34 C-2地区 出土弥生土器 (S=1/4) ……………	30
図35 高萩地区水利関係図 (S=1/5,000) ……………	32

表 目 次

表1 C-2地区 土坑の規模・時期 ……………	25	表3 土師器皿の法量と外傾係数 ……………	35
表2 高萩地区内各井出の水田面積 ……………	31		

写真図版目次

写真図版1 上段：調査地遠景（東より） 中段：A地区調査前近景（南より） 下段：C地区調査前近景（東より）	写真図版8 C-1地区 出土中世土器（26～43）
写真図版2 上段：A地区全景（南西より） 中段：確認調査区No.60（南西より） 下段：A地区・確認調査区No.60出土中世土器（1～3）	写真図版9 C-1地区 出土中世土器（44～66）
写真図版3 上段：B地区全景（南西より） 中段：B地区 土坑3（南東より） 下段：B地区 土坑3 A-Bセクション（北東より）	写真図版10 C-1地区 出土中世土器・古銭（67～85）
写真図版4 B地区 出土弥生土器（4～11・18）	写真図版11 C-1地区 出土弥生土器（86～92）
写真図版5 B地区 出土弥生土器（12～17・19～25）	写真図版12 上段：C-2地区全景（南東より） 中段：C-2地区 流路72遺物出土状況（北より） 下段：C-2地区 流路38遺物出土状況（北東より）
写真図版6 上段：C-1地区 南～東部拡張前（北東より） 中段：C-1地区 北部（南東より） 下段：C-1地区 土坑199遺物出土状況（南西より）	写真図版13 上段：C-2地区 遺構18（土器1枚目取上後）遺物出土状況（南西より） 中段：C-2地区 遺構18（土器2枚目取上後）遺物出土状況（南西より） 下段：C-2地区 遺構18（土器4枚目取上後）遺物出土状況（南西より）
写真図版7 上段：C-1地区 建物1（北より） 中段：C-1地区 土坑15遺物出土状況（東より） 下段：C-1地区 土坑15遺物出土状況（西より）	写真図版14 C-2地区 出土中世土器（93～97）
	写真図版15 C-2地区 出土中世土器（98～107）
	写真図版16 C-2地区 出土中世土器・古銭（108～127）
	写真図版17 C-2地区 出土中世土器（128～139）
	写真図版18 C-2地区 出土弥生土器（140～149）

第1章 調査の経緯と経過

農業が盛んな南あわじ市では、特産物のたまねぎをはじめとする野菜類と水稲を組み合わせた三毛作、あるいはこれに畜産を絡めた複合経営が広く普及しており、土地利用率が極めて高い。しかしこれを支える農家の大多数は零細経営規模である。また農地のほとんどは小区画で不整形、道路は狭小で用水路も未整備な場合が見受けられ、農作業に多大な労力を費やしているのが現状である。そのため労働生産性の向上を図る目的で大規模な圃場整備事業が近年、盛んに実施されるようになってきた。

当調査の原因となる事業名は経営体育成基盤整備事業（大日川東Ⅱ期地区2・4工区工事）である。平成12年度には事業に先立ち、対象となる約30haの範囲において、旧南淡町教育委員会を調査主体として遺跡分布調査および水利関係の調査と石造品の調査を行った。この水利調査の成果については第4章に記す。

平成17年度には確認調査を行い、遺跡範囲がA～Cの小地区に分かれることがわかった。当遺跡は石鍬等が表面採集される散布地として以前から周知されてきたが、この調査によって弥生時代と中世の埋蔵文化財包蔵地であることが明らかになった。（確認調査の成果については『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』南あわじ市教育委員会2009を参照）

この調査結果を基に事業者である兵庫県淡路県民局洲本土改良事務所と協議・調整を行った。A・B地区については、圃場面に関しては現状保存が可能となったが、排水路部分については工法変更が不可能で、埋蔵文化財の破壊が免れないため記録保存のための本発掘調査を行うことになった。C地区に関しては、圃場面・農道部分ともに工法変更が不可能で、ほぼ全域において記録保存のための本発掘調査が必要となった。C地区は範囲が広いため、南側のC-1地区と北側のC-2地区に分割し、C-2地区から調査を行うことにした。C-1地区については当初想定された範囲よりも遺跡が南に広がるのがわかり、事業の影響を受ける部分については調査範囲の拡張を行った。

平成17年度に本発掘調査と平行して基本的な整理作業を行っていった。平成21～22年度には報告書作成に向けて、残りの整理作業を行っていくことになった。

・確認調査

調査期間：平成17年6月20日～11月9日

調査面積：520㎡（2×2mの調査区130ヶ所）

調査担当者：南あわじ市埋蔵文化財調査事務所 山崎裕司

外業補助員：宇治田力・筒井健司・濱本善美

・本発掘調査

調査期間：平成17年12月12日～平成18年1月31日

調査面積：1,170㎡

調査担当者：山崎裕司・谷口梢（臨時職員）

外業補助員：宇治田力・筒井健司・濱本善美

・整理作業（平成17年度）

作業内容：出土遺物の洗浄・接合・整理・実測

整理担当者：谷口梢・山崎裕司



本発掘調査風景

内業作業員：宇治田力・垣脇美奈子・堺民樹・新崎都・筒井健司・豊田亜希子・濱本善美・榎本早苗
 ・整理作業（平成21～22年度）

作業内容：出土遺物の実測・トレース・拓本・写真撮影、
 遺構図面のトレース、報告書作成

整理担当者：山崎裕司

内業作業員：赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・
 富岡美早子・豊田亜希子・濱本善美・榎本早苗・
 松下矩之・三宅靖子



整理作業風景



図1 調査区設定図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1. 淡路島南部の地形と気候

淡路島は、周囲203km、総面積592km²を有する瀬戸内海最大の島である。北は明石海峡、東は紀淡海峡、西は鳴門海峡により画され、古来より瀬戸内海の海上交通において重要な位置を占めてきたと思われる。

地質・地形的には、花崗岩から構成される北部の津名山地と和泉砂岩や頁岩から構成される南部の論鶴羽^{ゆづるは}山地に大別される。論鶴羽山地の北西側には島内最大の三原平野が広がっており、大日・三原・成相川^{なりあい}などの各河川が、平野内を南東から北西方向に播磨灘に流れ込む。

淡路島南部の気候は、瀬戸内海式気候に太平洋側気候が加味された温暖な気候で年平均気温15～16℃、年平均降水量は全国平均よりやや少ない1,300mmを測る。



図2 南あわじ市の位置

2. 遺跡周辺の地形

高萩遺跡は南あわじ市賀集福井に所在する。

賀集地区は三原平野の南西端に位置し、東側には上述の論鶴羽山地、西側には南辺寺^{なんべいじ}山塊が広がるため、平野部とはいえ、特に遺跡の所在する地区南部は山地に挟まれた狭小な地形である。

遺跡は三原平野を流れる主要河川の一つである大日川の上流域左岸に立地する。調査地の標高はおおよそ62～64mを測り、平野部でも比較的高所に位置する。後述するが、弥生時代の拠点集落の一つと推定される^{みこそ}神子曾遺跡を俯瞰する位置に立地することは極めて重要と思われる。

遺跡周辺は扇状地地形が広がり、和泉層群の上に第三期層が厚く堆積する(註1)。第三期層の表面には広い範囲で玉石層が堆積し、人頭大の大きな礫も含まれる。また高低差の大きい河岸段丘が発達しており、河川を利用した水利には極めて不利である。詳しくは第4章で述べるが、水利に関しては南東方向の^{まさきいけ}正木池と呼ばれる大きな溜池が重要な水源となり、ここから「井出^{いで}」と呼ばれる用水路が低所に向かって次々と枝分かれし、用水が行き渡るような仕組みになっている。

このような土地条件が耕地開発の大きな障害となったことは明らかである。現在、我々は一帯に広がる水田風景を目にすることができるが、土壌と水利という二重の障害を克服してきた先人の努力の賜物といえる。

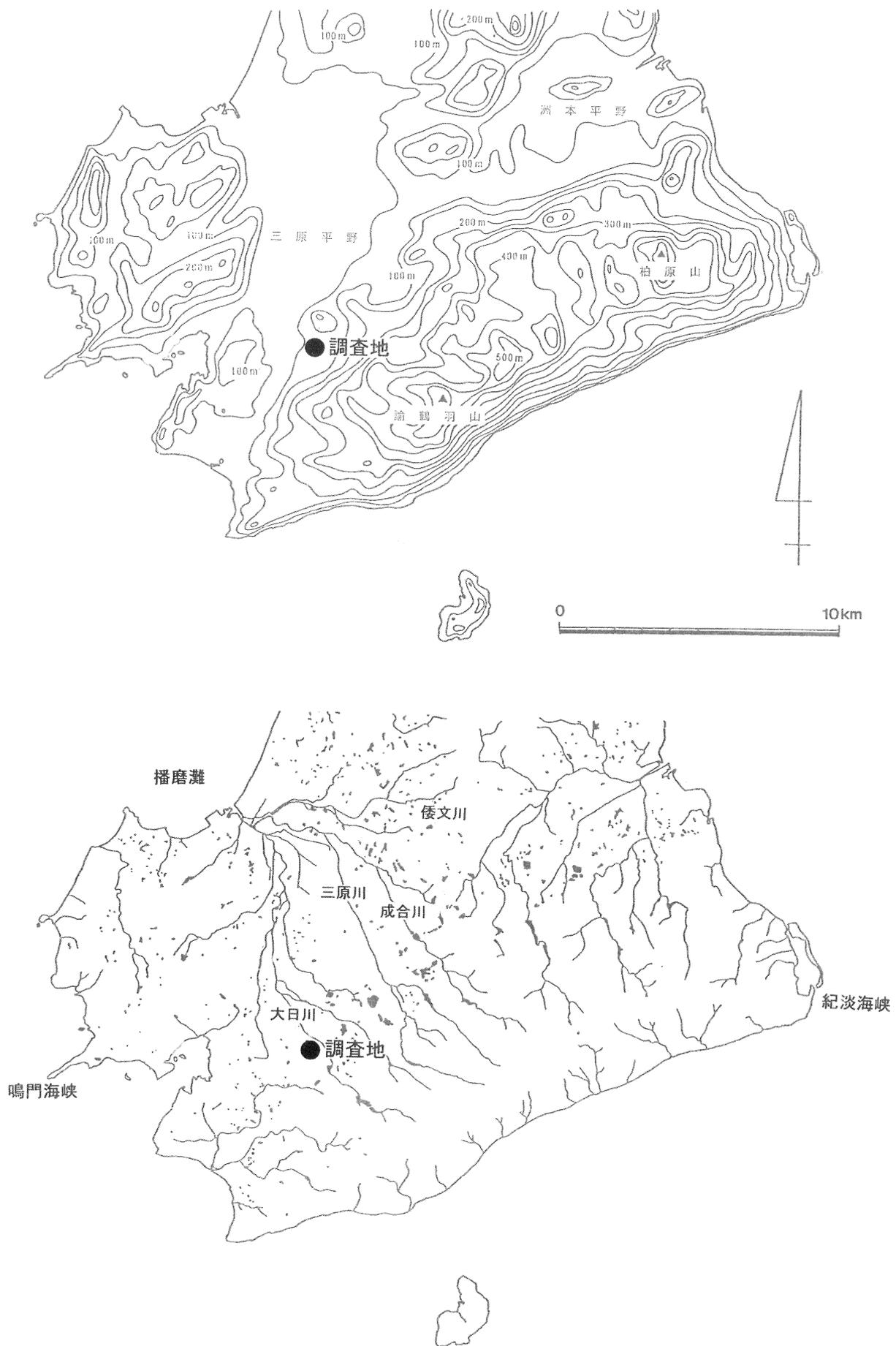


図3 淡路島南部の地形と調査地の位置

第2節 歴史的環境

①高萩遺跡（賀集福井）が所在する賀集地区では近年、圃場整備や下水道整備、オニオン道路・洲本灘賀集線（阿万バイパス）などの道路整備が行われ、大規模な開発事業が進展した。その結果、新しい遺跡の発見が相次ぎ、中には淡路島を代表するような重要な発見もあった。これらの新しく得られた知見を交えながら、賀集地区を中心とした歴史的環境を見ていくことにしたい。

1. 旧石器・縄文時代

大日川支流牛内川流域の②長原遺跡（賀集牛内）と③楠谷遺跡（賀集野田）ではサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。長原遺跡は周知の遺跡で、数点が表面採集されており、楠谷遺跡では確認調査時に1点が出土している（註2）。論鶴羽山地北～西側の三原平野と接する緩斜面の地帯では、旧石器から縄文時代の早い段階の遺跡が比較的多く分布する。

また兵庫県教育委員会によって平成16年度に行われた④神子曾遺跡（賀集鍛冶屋）の発掘調査で、縄文時代中期の廃棄土坑が検出されており（註3）、遺跡周辺の分布調査では縄文時代のサヌカイト製の石鏃が多数採集されていることから（註4）、周辺にこの時期の集落が展開していた可能性が高い。

2. 弥生時代

平成16年度の⑤嫁ヶ淵遺跡（賀集立川瀬）の発掘調査により、弥生時代前期末～中期初頭頃の土器や木製農耕具等が溝から出土した。平成14～15年度の発掘調査では、弥生時代中期前葉頃と考えられる円形竪穴住居が検出されており、前～中期において継続して集落が営まれていたと推定される（註4）。

弥生時代中期には、上述した神子曾遺跡の調査において、島内最大規模の周溝墓群が検出されており、周辺に三原平野でも中心的な集落が展開していた可能性が高い。また後・終末期の遺構も検出されている（註3）。

三原平野周辺の河川の中・上流域において、高萩遺跡を含め、弥生時代中期末～終末期に属する小規模な遺跡の発見事例が増えつつある。賀集地区においては、大日川上流右岸に位置し、平成16年度の発掘調査で弥生時代終末期の土坑が検出された⑥衾つノ木遺跡（賀集生子）（註4）、南辺寺山山頂の⑦西山遺跡（賀集八幡南）、南辺寺山東側山麓に位置し、後期～終末期の竪穴住居を検出した⑧護国寺東遺跡（賀集八幡南）（註2）などが分布する。

3. 古墳時代

南辺寺山東側山麓には⑨西山北古墳（賀集八幡北）・⑩西山南古墳（賀集八幡南）があり、西山北古墳は石室全長8.02mで（註4）、現存する横穴式石室墳としては島内最大規模で、島内の有力な首長墓の一つと推定される。また論鶴羽山地西側山麓にも、⑪野田山古墳（賀集野田）・⑫小山古墳（賀集野田）等の横穴式石室墳がある（註2）。賀集地区では、前・中期の古墳は今のところ未発見である。

中期の⑬平松遺跡（賀集八幡）では、堰状遺構付近に土器だまりが形成され、完形に近い手づくね土器6点等が出土しており、水にまつわる祭祀を行ったと推定されている（註5）。また近年、市内でも出土例が増えつつある韓式系土器が2点出土している（註6）。

4. 歴史時代

古代三原郡は倭文・幡多・養宜・榎列・神稻・阿万・賀集の七郷から構成されていた。淡路島では古代地名が比較的多く残存しており(註7)、これらの古代地名のほとんどが現在の地区の名称として使われている。

賀集郷には嫁ヶ測遺跡をはじめとして官衙的な遺跡が多く分布することから、国府の推定地である榎列郷や国分寺が所在する養宜郷などと共に、淡路国において極めて重要な役割を果たしていた地区と推定される。

嫁ヶ測遺跡では7世紀末～8世紀前葉頃の大型掘立柱建物群が検出され、蹄脚円面硯をはじめとして各種硯が出土している。三原郡衙関連遺跡でかつ国府的機能の一端を担っており、さらに遺跡のすぐ西側に大日川が流れていることから、港(河津)の機能があったと推定されている(註4)。近年の重要な発掘調査成果の一つである。

また大型方形柱穴が検出された⑭石ヶ坪遺跡(賀集八幡北)、円面硯や緑釉陶器が出土した⑮大野遺跡(賀集八幡南)、倉庫と思われる総柱建物群が検出された⑯岸ノ上遺跡(賀集八幡南)の他、銀製の和銅開珎が表面採集されている賀集鍛冶屋周辺(註2)にも官衙的な遺跡が存在する可能性が高い。

⑰戸川池窯跡(賀集牛内)では、8世紀末～9世紀初頭頃の須恵器が多数表面採集されている(註4・8)。

護国寺は八木の淡路国分寺や成相寺同様、律令期に起源をもち、現存する極めて長い歴史をもつ寺社であり、護国寺東遺跡では10世紀頃と思われる軒平瓦が出土している(註2)。

賀集郷は中世になると賀集庄となり、賀集寺とも呼ばれた護国寺は賀集八幡神社の神宮寺として繁栄し、多くの院坊(塔頭)をもっていたことがわかっている(註1)。護国寺東遺跡では、その位置から院坊の建物ではないかと思われる14～15世紀頃の掘立柱建物等が検出されている(註2)。

護国寺に伝来する『護国寺文書』は、淡路島を代表する中世文書である。第5章でも述べるように、高萩地区と深い関係をもつ国人「久米氏」の関係する文書がいくつか含まれる。

賀集地区には中世城館も極めて多く、⑱佐々木土居城跡(賀集八幡南)・⑲西山南土井館跡(賀集八幡南)・⑳城が丸城跡(賀集八幡)・㉑古城山城跡(賀集鍛冶屋)・㉒賀集城の腰城跡(賀集賀集～賀集鍛冶屋)・㉓城の土居城跡(賀集福井)・㉔丹生山城跡(賀集野田)が分布する。

中世の集落跡としては、㉕上久保遺跡(賀集野田)(註4)・㉖久保ノカチ遺跡(賀集福井)(註9)等で発掘調査が行われている。





図4 調査地周辺の遺跡（図と文章中の番号は対応する）

第2章の註

1. 『三原郡史』三原郡史編纂委員会1979
2. 『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 1995～1999年度 埋蔵文化財発掘調査』三原郡広域事務組合2001
3. 『平成16年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2006
4. 『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 2000～2004年度 埋蔵文化財発掘調査』南あわじ市教育委員会2008
5. 松下智義「平松遺跡出土の韓式系土器について」『のじぎく文化財保護研究財団 紀要 創刊号』のじぎく文化財保護研究財団1996
6. 定松佳重・谷口梢「南あわじ市出土の韓式系土器について」『韓式系土器研究Ⅸ』韓式系土器研究会2006
7. 武田信一『淡路島の地名研究』兵庫県地名研究会1996
8. 浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌 第3号』淡路考古学研究会1977
9. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ 2006年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会2010

第3章 調査成果

第1節 A地区

遺跡東部に位置し、標高は約64mである。B地区同様、段丘直上に立地し、北東側は段丘地形を踏襲すると思われる高低差の大きな畦で画される。調査区の幅約3m、長さ約25m、面積は約75㎡で、南西部でわずかながら中世の遺構が検出された。

1. 層序 (図8)

遺物包含層はほとんど残っておらず、耕地開発により削平を受けた可能性が高い。5層以下は非常に不安定な扇状地堆積層であるが、これらの層の上面に遺構面が形成されていた。

2. 遺構 (図9、写真図版2)

全体に検出遺構は少なかった。北東側は埋土が淡灰色砂質土で、遺物は全く出土していない。自然地形、あるいは遺構面に人頭大の礫が多く含まれることから、耕地開発の際に礫を取り除いた跡の可能性も考えられる。南西側の土坑状の遺構13とその周囲の遺構9～12は埋土が黒色粘砂質土で、このうち遺構10～13からは細片化しているが中世後半と思われる遺物が出土した。

3. 遺物 (図6・7、写真図版2)

出土土器は全て中世の土師器片であり、出土遺物中に瓦器・須恵器片は含まれていなかった。出土遺物は細片化しており、図化できる資料は遺構13出土の1点のみであった。参考としてA地区の西約10mの位置に設定した確認調査区No.60の出土遺物をあわせて図示する。

1は遺構13、2が確認調査区No.60の遺構1から出土した土師器皿である。ともに回転台により成形されており、体部がわずかに内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。2は器壁が非常に薄いつくりである。1は復元口径11.6cm、2が復元口径10.5cmを測る。

3は確認調査区No.60の遺構1から出土した土師器小皿である。回転台成形され、底部外面には回転糸切痕が残る。口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径5.9・復元底径4.8・器高0.9cmを測る。

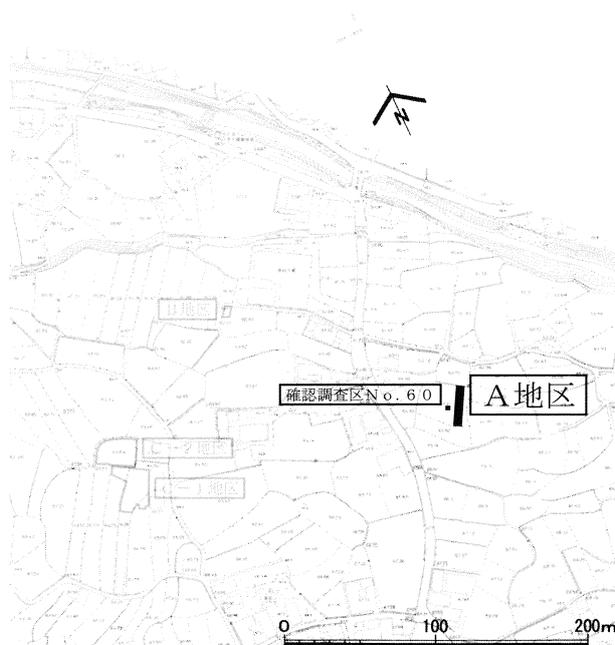


図5 A地区の位置

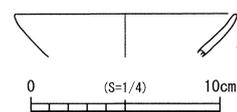


図6 A地区 遺構13
出土中世土器

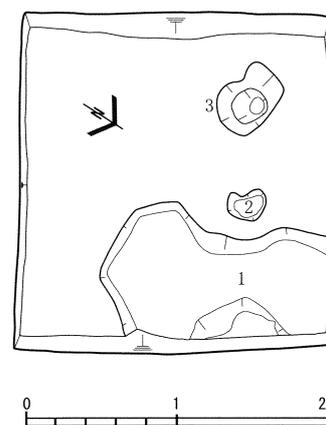
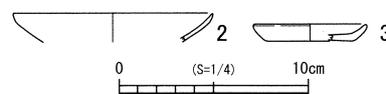
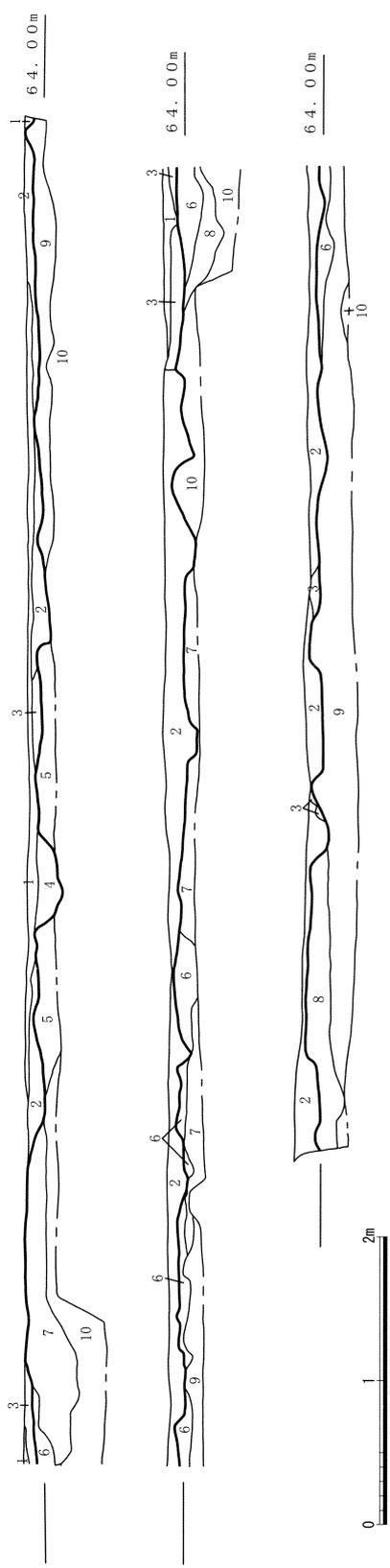


図7 確認調査区 No.60
出土中世土器・平面図



- 1 10YR7/1灰白色砂質土 (耕土)
- 2 1と3攪乱状に混じる (2~5cm大の礫、腐り礫含む)
- 3 7.5YR4/3褐色砂質土 (Fe沈着、腐り礫含む、床土)
- 4 5Y4/1灰色礫混砂質土 (10~20cm大の礫含む)
- 5 2.5Y5/4黄褐色砂質土
- 6 2.5Y5/3黄褐色砂質土
- 7 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
- 8 7.5YR3/1黒褐色粘砂質土 (腐り礫含む)
- 9 10YR3/1~3/2黒褐色礫混粘砂質土 (5~10cm大の礫)
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色礫混砂質土 (10~30cm大の礫)

図8 A地区 南東壁層序図

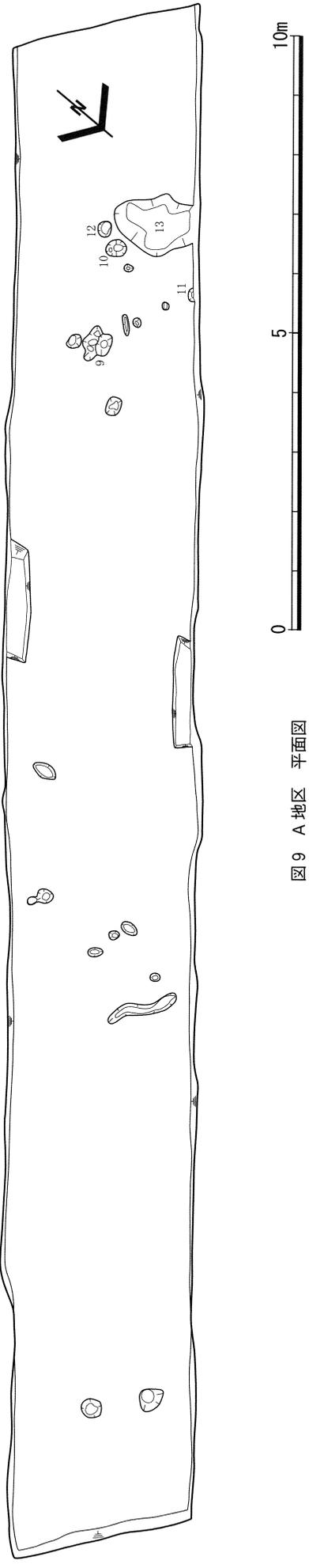


図9 A地区 平面図

第2節 B地区

遺跡北部に位置し、標高は約62mである。北東側にはA地区方向へ続く段丘面が見られるが、高低差が4m以上もあり、A地区よりさらに発達した様相を見せる。幅約3m、長さ約10m、調査面積は約30㎡の小さな調査区で、弥生時代後期前半を中心とする遺構が検出された。

1. 層序 (図11・12、写真図版3)

図11の5～10層は弥生時代の遺物を多く含む。13層の上面で遺構検出を行った。13層が扇状地堆積物の粗い層であることから、粒子の細かい10層等の染み込みで12層が形成されたようである。12層はA-B・C-Dセクション3層、E-Fセクション4層と対応する。これらの層を遺構埋土と誤認し、やや掘りすぎた部分がある。

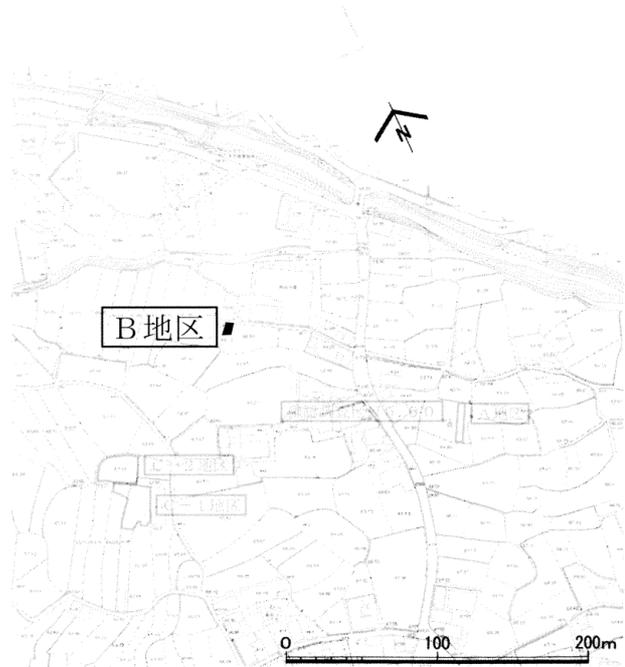
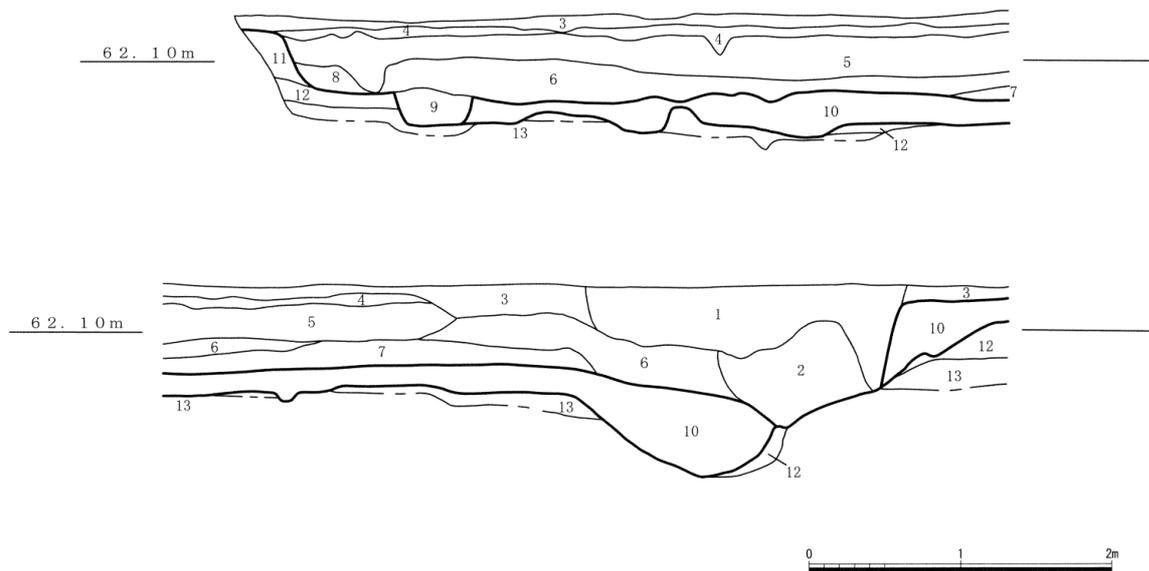


図10 B地区の位置



- | | |
|--------------------------|---------------------------------|
| 1 攪乱 | 7 10YR3/2黒褐色細砂質土 (腐り礫含む) |
| 2 10YR6/8明黄褐色砂質土 | 8 10YR3/2黒褐色礫混砂質土 (腐り礫含む) |
| 3 2.5Y6/1黄灰色砂質土 (耕土) | 9 10YR2/1黒色粘砂質土 (遺構7埋土) |
| 4 10YR5/2灰黄褐色砂質土 (Fe沈着) | 10 10YR3/2黒褐色砂質土 (腐り礫含む) |
| 5 10YR3/1黒褐色細砂質土 (腐り礫含む) | 11 10YR4/2灰黄褐色砂礫土 (2～5cm大の礫) |
| 6 10YR3/3暗褐色細砂質土 (腐り礫含む) | 12 10と13混じる |
| | 13 2.5Y6/6明黄褐色礫混砂質土 (5～10cm大の礫) |

図11 B地区 南東壁層序図

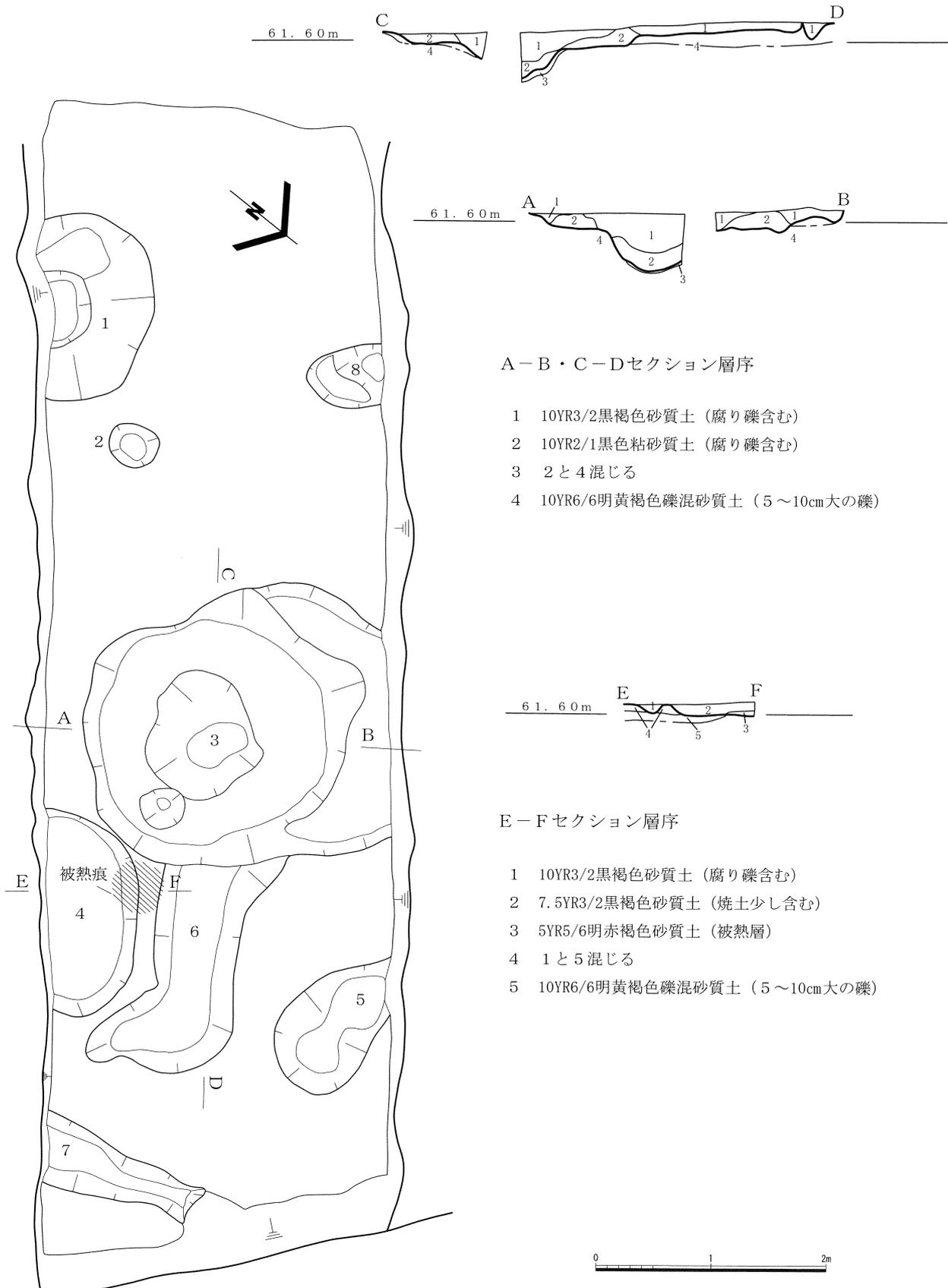


図12 B地区 平面図・遺構層序図

10層と溝7埋土である9層の切りあいは確認できたが、遺構1や土坑4の切りあいが確認できなかったことから、検出遺構に時期差がある可能性も考えられる。

2. 遺構（図12、写真図版3）

土坑3は竪穴住居の中央土坑と考えられることから、竪穴住居の中心部付近を検出したと考えられる。調査区の制約のため全体のプランがわかり難いが、図11の10層等が住居内に堆積した状況を示しており、北東～南西でおおよそ8～9m程度の規模と推定される。

遺構埋土は全て黒～黒褐色で同じような土色・土質である。このうち土坑3・4、遺構5、溝6から弥生時代後期前半の土器が出土している。

次に竪穴住居に伴うと考えられる主要な遺構について述べる。

土坑3 2段掘りの形状から中央土坑と考えられ、1段目の深さが約15cm、2段目はさらに一段目から約40cm掘り下げられ、1段目の直径が最大で約240cm、2段目が約110cmを測る。

土坑4 最深部約10cmの浅い窪みで、焼土を含む。西側肩部に被熱痕が認められた。

溝6 竪穴住居の屋内溝と考えられ、溝底は土坑3に向かって緩やかに低くなる。中央部で幅約75cm・深さ約6cmを測る。

3. 遺物

遺構・包含層から、弥生時代後期前半と思われる土器が出土している。

(1)遺構出土弥生土器（図13、写真図版4・5）

土坑3 8～13が出土した。8は甕の口縁部と思われる。ヨコナデで仕上げられ、端部に面をつくる。9は埴形高坏の坏部ではないかと思われる。外面にヘラミガキを密に施す。10は台付鉢等の底部と思われ、ナデにより仕上げられている。復元底径5.4cmを測る。11は鉢で比較的残りが良い。底部がやや突出し、底体部境がつぶれたような形状で丸みを帯びている。体部は内湾し、ナデにより仕上げられている。口径9.9・器高4.1・底径3.8cmを測る。12・13は底部片で、体部外面はタタキ後、ハケメを施している。12は底径5.7cm、13は復元底径6.8cmを測る。12は4の底部の可能性も考えられる。

土坑4 甕の口縁部と思われる6・7が出土した。6は「く」字状を呈し、直線的な形態である。端部に面をつくり、細い1条の凹線が施されている。7は他とはやや形態が違い、端部に向かって緩やかに外半する短い口縁部である。また他の口縁部は端部まで厚みがほぼ均一であるが、7は端部に向かって細くなる形態である。内面にはハケメが施されている。

遺構5 14の底部片が出土した。底径5.2cmを測る。

溝6 4・5が出土した。4の破片の一部は土坑3からも出土している。4は比較的残りが良く、甕の口縁部から体部下半にかけての形態や調整方法のわかる唯一の資料である。口縁は「く」字状で、ヨコナデで仕上げられており、端部に明瞭な面をつくる。体部外面にタタキにより成形した跡が残るが、頸部付近ではその上から縦方向のハケメが施されている。体部内面はケズリ痕が顕著に残る。復元口径約18.4・復元頸部径約14.4・復元体部最大径約24.8cmを測る。5も甕の口縁部と思われ、ヨコナデで仕上げられているが、端部は面でなく丸みを帯びている。

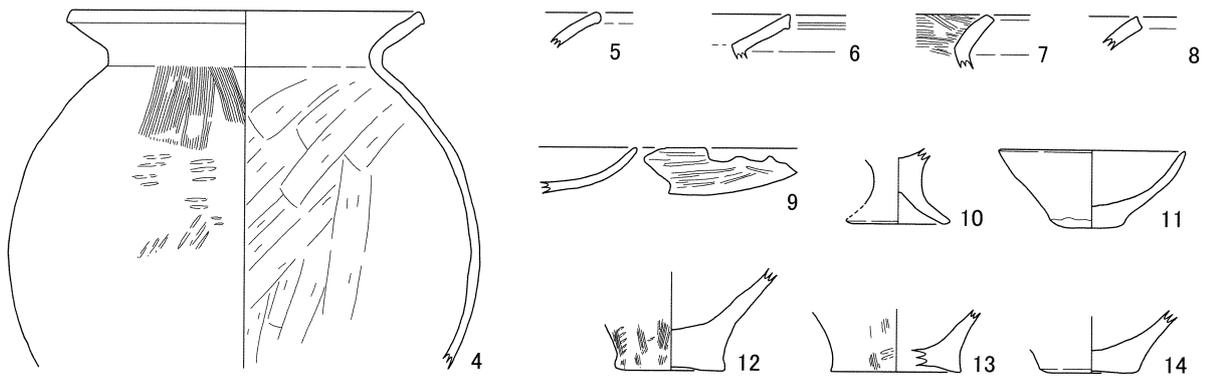


図13 B地区 遺構出土弥生土器

(2)包含層出土弥生土器 (図14、写真図版4・5)

15・17は高坏の坏部と思われる。15は坏部から直立して立ち上がり、やや外反する口縁部が付く。口縁部外面には細い凹線3条が施されている。内側にはヘラミガキが施されている。復元口径約21.4cmを測る。17は口縁部が剥離している。外面には稜部分に幅約1.6cmの貼り付けが見られる。坏部内面には粗いヘラミガキが、外面にはハケメが施されている。稜部分の復元径は約18.8cmを測る。16は壺もしくは器台の口縁部であろう。外面には波状文が施され、円形浮文を貼り付けている。復元口径約19.9cmを測る。

18は高坏の中空の脚部で、下部に円形の透し穴が空けられ、外面にヘラミガキが施されている。

19はおそらく広口壺の頸部で、キザミが施された1条の凸帯が張り付けられている。体部外面にはヘラミガキが施される。

20は体部の開きが小さいことから、甕の底部ではないかと思われる。体部外面は縦方向にハケメ、内面は横方向にハケメが施される。21は外面の一部にヘラミガキが見られ、体部の開きが非常に大きいことから、細頸壺の底部ではないかと思われる。これ以外の底部の器種については不明である。21・23の内面には底部中央から放射状にハケメが施されている。22・24の内面には横方向にハケメが施されている。25の外面には薄くタタキ痕が残る。底径は20が推定で5.6cm、21が4.2cm、22が4.0cm、23が3.9cm、24が3.5cm、25が推定で4.0cmを測る。

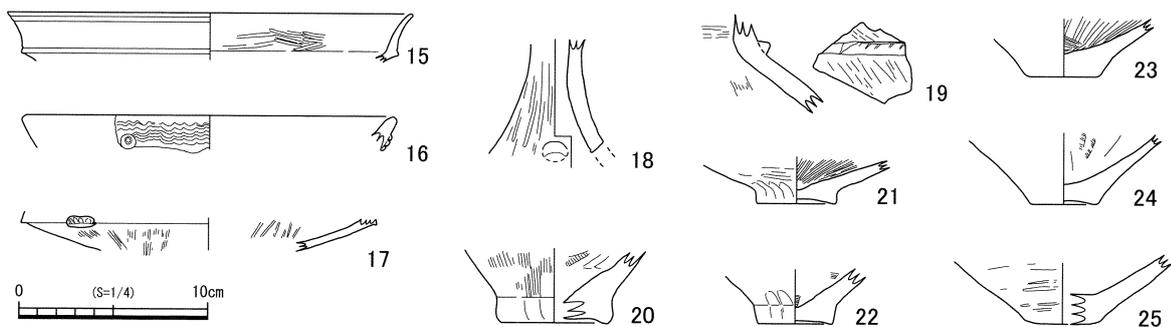


図14 B地区 包含層出土弥生土器

第3節 C-1地区

遺跡西部に位置する。標高は約64mで、南から北方向に緩やかに低くなる。中世の遺構が中心であるが、弥生時代の遺構もわずかながら検出された。中世は掘立柱建物2棟が復元でき、建物1が南部調査区外に広がることわかったため調査区の拡張を行った。拡張後の調査区の面積は約600㎡である。

1. 層序 (図16)

層序図24～26層の上面が遺構検出面で、A・B地区と比べると礫が少なく、安定した土壌である。

2～13層は床土や盛土等で、耕地開発に伴う層が厚く堆積している。16層に中世の遺物が含まれるが、遺物包含層の残りが非常に悪く、開発の影響を大きく受けていると推定される。

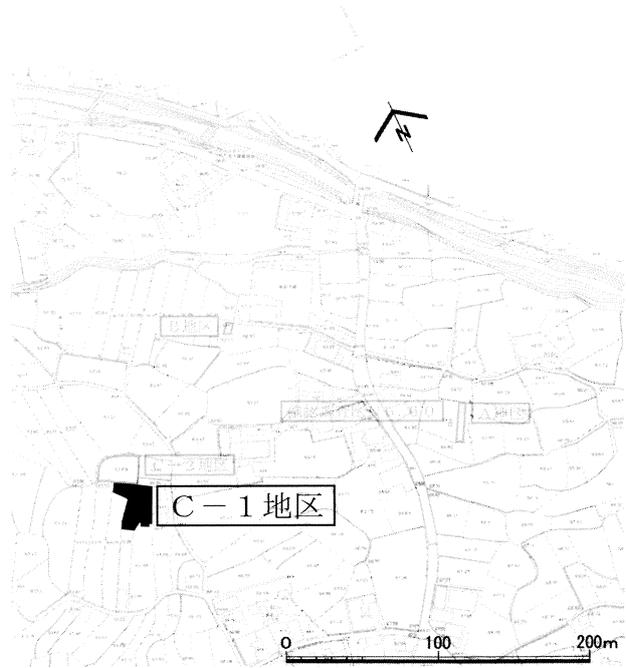


図15 C-1地区の位置

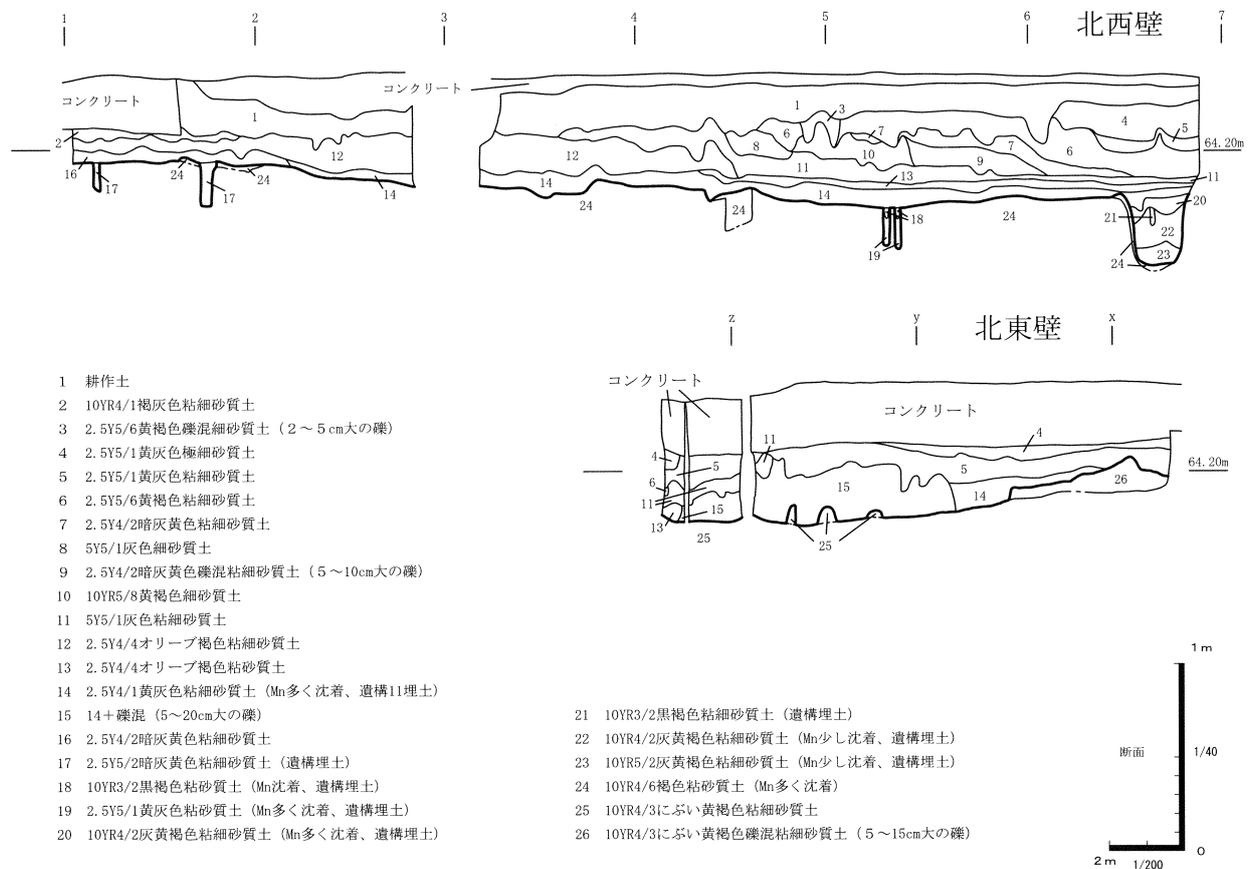


図16 C-1地区 北西・北東壁層序図

2. 遺構 (図17、写真図版6)

遺構は中世が中心である。特に調査区南部で柱穴を多数検出しており、建物1・2が復元できた。これらの主要な遺構については後述する。建物群の北側に広がる遺構11は流路と窪地状の地形で構成される。中世の遺物が出土しており、ほとんどは流れ込みと思われる。土坑80・199からは弥生時代中期後半の遺物が出土しており、地区北部の一部の遺構は弥生時代の可能性がある。

弥生時代と中世の遺構埋土は暗灰色の同じ色調を呈し、判別は不可能であった。この暗灰色の埋土は後述するC-2地区のI期の土坑埋土に似ている。II期に対応する淡灰色の埋土は見られなかった。

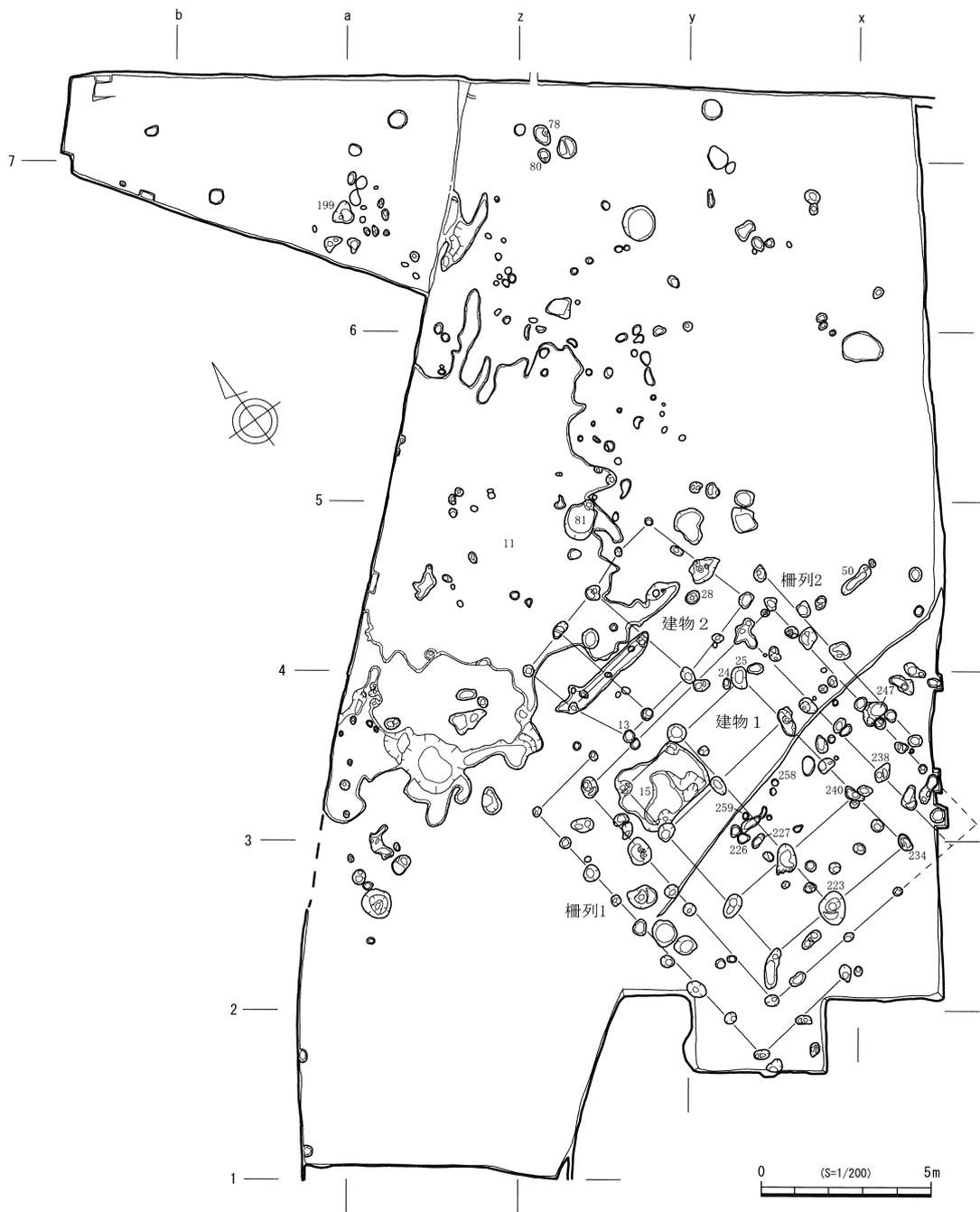


図17 C-1地区 平面図

建物1（図18、写真図版7） 総柱の掘立柱建物で、母屋部分と廂と推定される付属部分に分かれる。母屋部分は梁行2間×桁行3間で約33.5㎡の規模である。特に母屋部分南側の柱穴は、平面形がいびつな楕円形を呈するものも多く、柱の抜き取りが行われたのではないと思われる。

付属部分については母屋部分の四面を廂が囲い、東側にはさらに孫廂が付属する構造と思われる。一部未検出部分があるが、付属部分を含めた建物規模は約65.4㎡と推定される。付属部分の柱穴については、母屋部分の柱筋の延長上に設定されているものが多く、ある程度の規則性が見られる。

付属部分の外側にさらに柱列群が見られるが、付属部分とは違い母屋部分の柱筋とは全く対応していない。したがって建物とは構造的に関わりが無い柵列や塀のような施設と推定される。

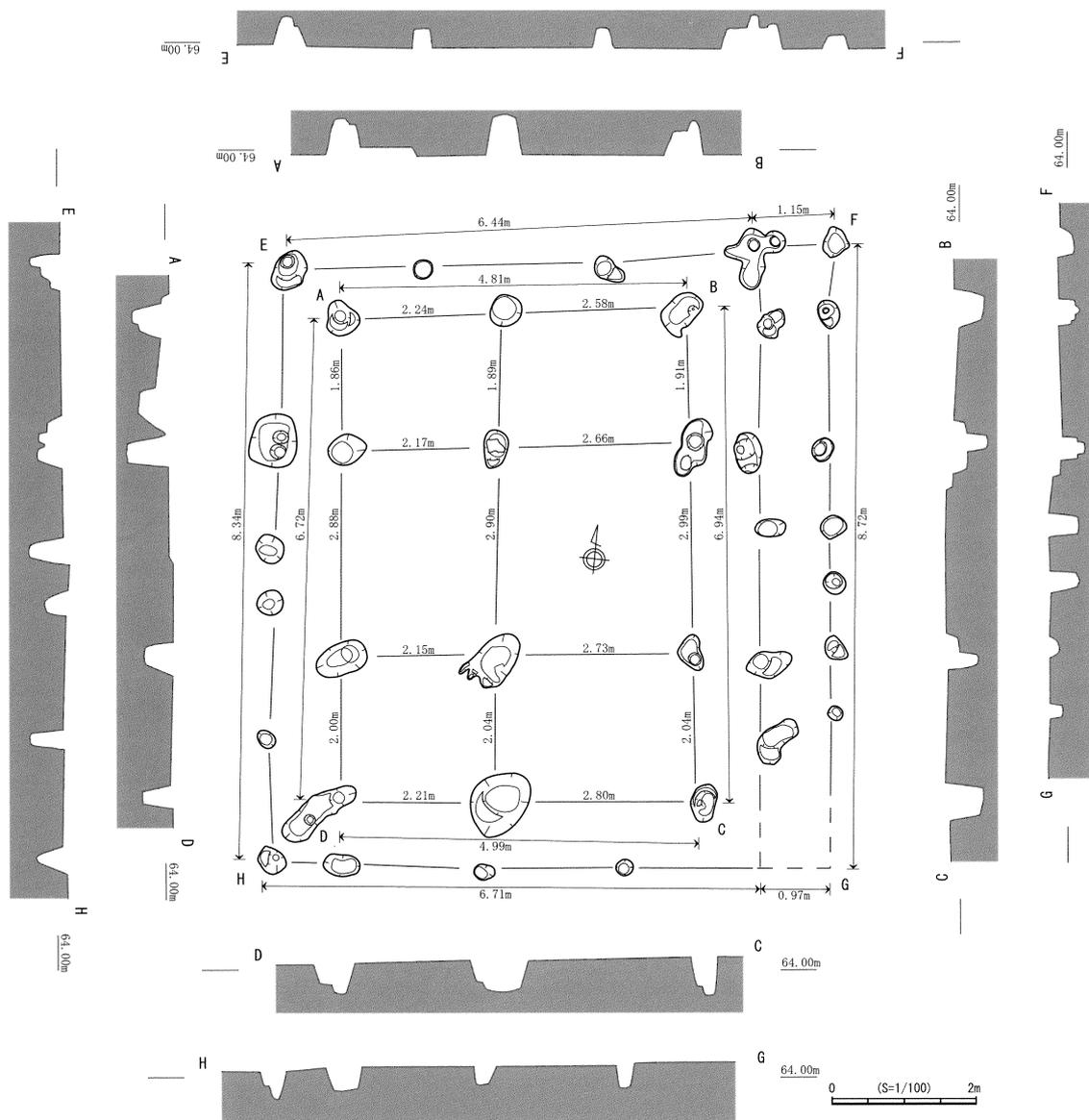


図18 C-1地区 建物1平面・断面図

土坑15（図19、写真図版7） 建物1の母屋部分北西1間×1間に対応するように掘られた約2m×2.5mの隅丸方形の土坑である。建物柱穴との切りあいから、建物1の廃絶後に掘削されたと思われる。埋土は炭を多く含んでおり、また人頭大の礫が南側に、焼土が中央付近に集中して出土している。礫はすべて

ではないが、被熱したものが含まれる。礫を取り除いた最下部から、2枚の銅銭が出土している。

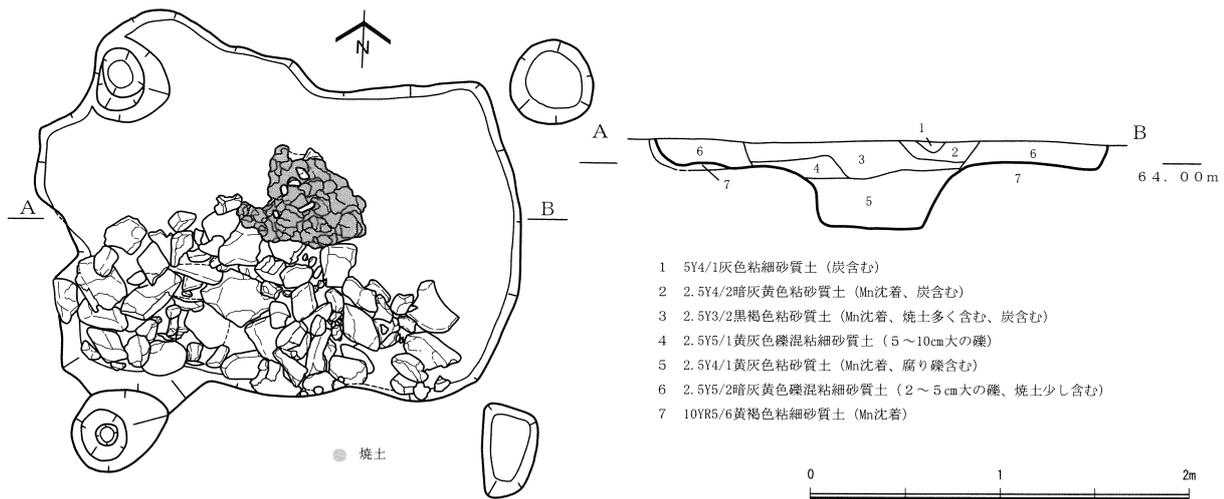


図19 C-1地区 土坑15遺物出土状況平面・層序図

建物2 (図20) 梁行2間×桁行4間の掘立柱建物で規模は約20.4㎡である。特に南西隅の柱間が不揃いで、建物の平面形が台形に歪んでいる。一部建物内部の柱穴が確認できなかったが、総柱であった可能性も考えられる。柱穴からの出土遺物は少なかったが、建物1よりやや新しい様相を示す。

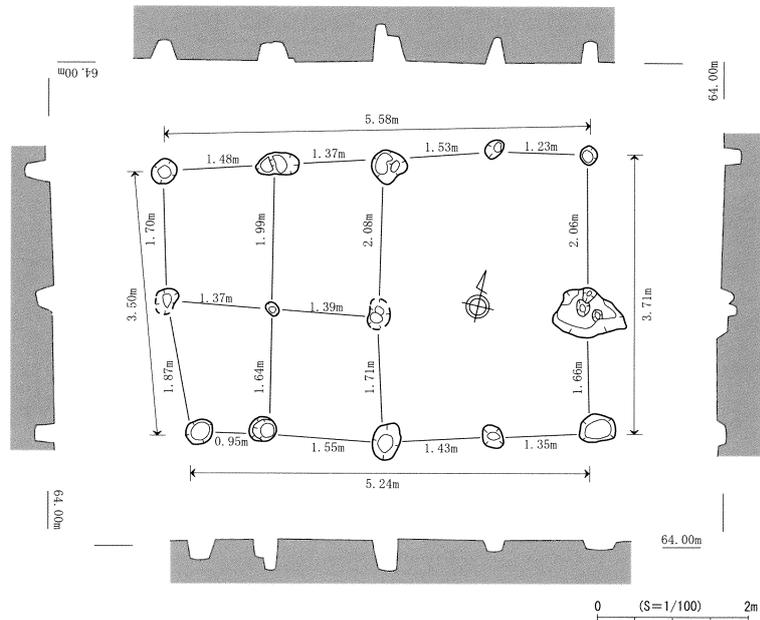


図20 C-1地区 建物2平面・断面図

3. 遺物

中世の土器と古銭、弥生時代中期後半の土器が出土している。

(1) 遺構出土中世土器・古銭

(図21・23、写真図版8~10)

建物1柱穴 26~35が出土した。26~28は柱穴25から出土した。26の口縁端部周辺は須恵器の重ね焼き痕に似ているが、回転台成形でなく口縁部をヨコナデしていることから瓦器塚の破片と思われる。復元口径16.1cmを測る。27は回転台成形の土師器皿で、体部は底部から内湾気味に立ち上がるが上半は直線的である。口縁部を強くロクロナデし、器壁が薄くなっている。口縁端部を丸くおさめる。復元口径11.9cmを測る。28は土師器皿底部で体部は内湾気味に立ち上がる。磨耗が激しいが外面に回転糸切痕が残る。底径7.0cmを測る。

30・31は柱穴223から出土した。30は回転台成形の土師器皿で、体部は少し内湾し口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.6cmを測る。31は回転台成形の土師器皿で、体部は直線的であるが底部からは内湾気味に立ち上がる形態のようである。口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.7cmを測る。

29・32は柱穴240から出土した。29は回転台成形の土師器小皿で、体部は内湾し口縁端部を丸くおさめる。器高は0.9cmを測る。32は回転台成形の土師器皿で、体部は直線的で口縁端部を丸くおさめる。復元口径14.1cmを測る。

33・34は柱穴234から出土した。33は回転台成形の土師器皿で、体部は直線的であるが底部からは内湾気味に立ち上がる。口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.0・復元底径6.3・器高3.0cmを測る。34は回転台成形の土師器皿で、体部は内湾し内面に段状にロクロナデ痕が残る。口縁端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。口径12.6・底径7.0・器高2.8cmを測る。

35は柱穴238から出土した。須恵器皿底部で底部外面に回転糸切痕が残る。体部は底部から内湾気味に立ち上がる。復元底径7.6cmを測る。

土坑15 36・82（写真図版のみ）が出土した。36は回転台成形の土師器皿で、体部は内湾し口縁端部は丸みを帯びた面をつくる。復元口径12.3cmを測る。82は遺構最下部から出土した2枚の銅銭の内の1枚で聖宋元寶（1101年）である。もう一枚は細片化しており不明である。

建物2 柱穴 37が柱穴13から出土した。回転台成形の土師器皿で、器壁が非常に薄いつくりである。体部は内湾し口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.0cmを測る。

遺構11 38～50が出土した。このうち49・50は土坑状を呈する遺構81から出土しているが、遺構11の一部と思われる。

38は瓦器皿と思われる。底～体部外面にかけてユビオサエ痕が残り、口縁部をヨコナデする。内面にはヘラミガキを粗く施す。39は回転台成形の須恵器皿で、口縁部に重ね焼き痕が残る。体部は内湾し口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.6cmを測る。

40～42は回転台成形の土師器皿である。体部の形態は様々で、40は直線的、41は内湾、42は外反する。40・42は口縁端部を丸く、41は尖り気味におさめる。復元口径は40が13.0cm、41が11.7cm、42が11.9cmを測る。

43～46は土師器皿の底部で、外面には回転糸切痕が残る。43の体部は底部から直線的に立ち上がるが、44～46は内湾気味に立ち上がる。復元底径は43が6.9cm、44が6.4cm、45が7.0cm、46が7.1cmを測る。

47・48は回転台成形の土師器小皿である。47は短い口縁部を尖り気味におさめ、底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径5.6・復元底径5.0・器高0.9cmを測る。48は口縁端部を肥厚気味に丸くおさめる。器高は1.4cmを測る。

49は土師器皿の底部で、外面には回転糸切痕が残る。体部は内湾気味に立ち上がる。底径6.9cmを測る。50は回転台成形の須恵器皿で、体部は内湾し口縁端部を丸くおさめる。

その他の遺構 51は遺構50から出土した。回転台成形の土師器皿で、体部は直線的で口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径12.2cmを測る。

52は遺構24から出土した。土師器皿もしくは小皿の底部で、体部は直線的に立ち上がる。復元底径は4.8cmを測る。

53は遺構28から出土した。土師器小皿の底部で、体部は直線的に立ち上がる。復元底径は5.1cmを測る。

54は遺構78出土、55は遺構226出土、56は遺構227出土の土師器皿底部で、外面には回転糸切痕が残る。54は体部が内湾して立ち上がり、復元底径7.8cmを測る。55は体部が内湾する形態と思われる。底径5.7cmを測る。56は体部が底部から内湾気味に立ち上がる。復元底径6.0cmを測る。

57は遺構247から出土した回転台成形の須恵器皿で、口縁部に重ね焼き痕が残る。体部は内湾し口縁

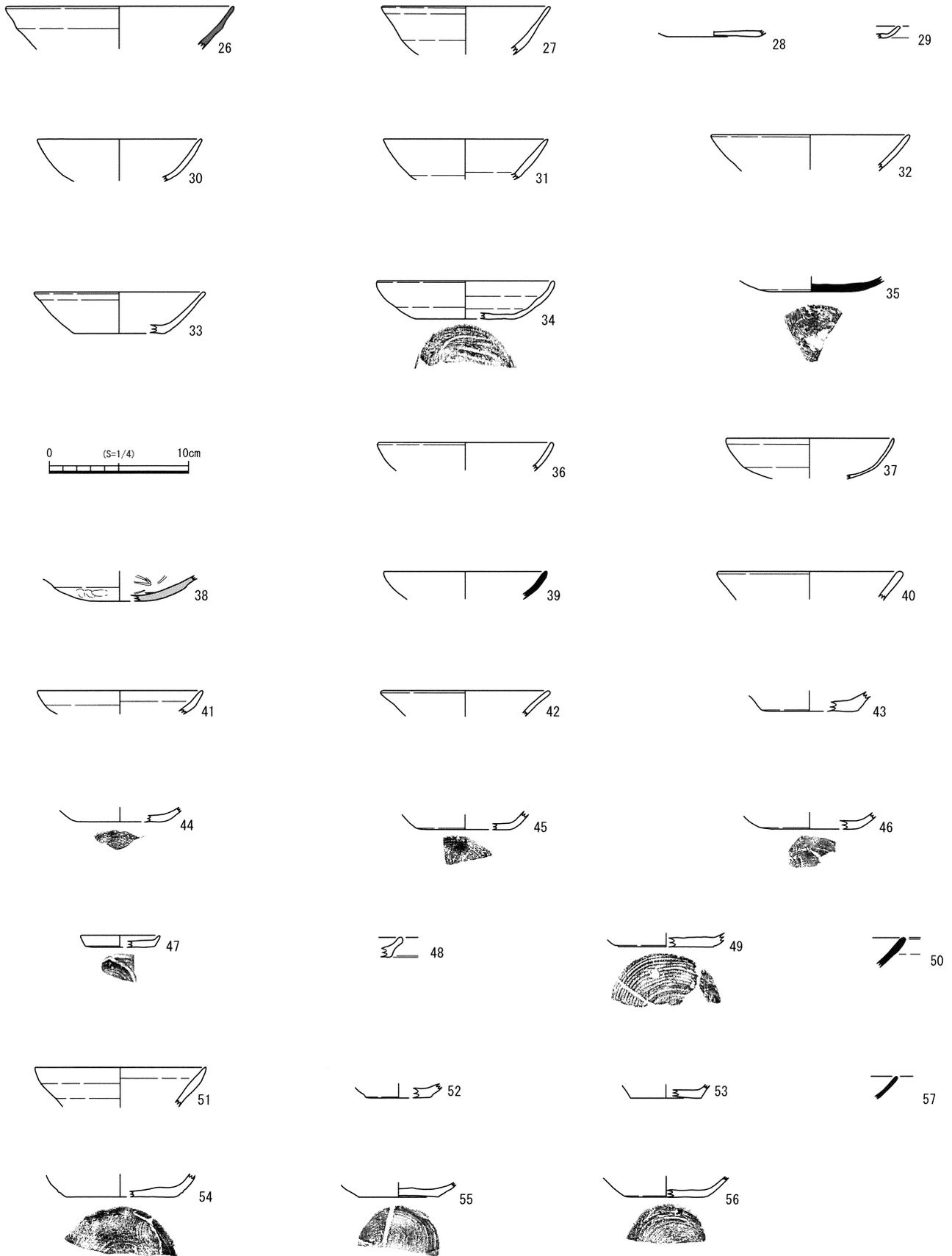


图 21 C-1 地区 遺構出土中世土器

端部を丸くおさめる。

83（写真図版のみ）は遺構258から出土した銅銭で、熙寧元寶（1068年）である。84・85は遺構259から出土した銅銭で、2枚が完全に癒着してしまっている。84が開元通寶（960年）、85が皇宋通寶（1038年）である。

(2)包含層出土中世土器（図22、写真図版9・10）

ほとんどの遺物は建物群より北側で出土しており、遺構11の上層部から出土した遺物も一部含まれている可能性がある。

58は備前焼播鉢である。口縁端部の特に上方への拡張が顕著で、乗岡編年中世4期（註1）と思われる。復元口径27.0cmを測る。

59は須恵器壺の口縁部である。口縁は「く」字状を呈し、端部は面をなす。復元口径18.8cmを測る。

60～66は東播系の須恵器鉢であるが、64のみ土師器に近い焼成である。口縁端部をほとんど拡張しない60、端部を上下に少し拡張し丸みをもつ61・62、端部の特に上方への拡張が顕著な63～66に分類できる。

67は羽釜形タイプの土製煮炊具で播磨形（註2）と思われる。

68・69・74・75・78～80は回転台成形の土師器皿で、68・69・75・80の底部外面には回転糸切痕が明瞭に残る。体部は底部から内湾気味に立ち上がり、68・69・74は体部が内湾する。68は口縁部を強くロクロナデして器壁が薄くなっており、端部を丸くおさめる。口径11.7・底径6.7・器高3.4cmである。69は底径6.1cm、74は復元底径6.8cm、75は復元底径6.9cm、78は復元底径7.7cm、79は復元底径6.4cm、80は復元底径6.5cmを測る。

70～73・76・77・81は回転台成形の土師器小皿で、70・71・76・81の底部外面には回転糸切痕が残る。71・77は底部が突出する形態である。口縁部が残っている70～73はすべて直線的で、端部は70が尖り、71～73は丸くおさめる。70は復元口径7.8・復元底径6.4・器高1.4cm、71は復元口径7.6・復元底径6.1・器高1.5cm、72は復元口径7.3・復元底径6.4・器高1.0cm、73は復元口径6.9・復元底径5.7・器高1.0cm、76は復元底径4.8cm、77は復元底径5.1cm、81は復元底径5.1cmを測る。

(3)弥生土器（図24、写真図版11）

86～88は包含層、89は土坑80、90～92は土坑199から出土した。弥生時代中期後半と思われる。

86は壺の口縁部と思われる。端部は面をなし、復元口径17.2cmを測る。87は86の近辺で出土しており、胎土・焼成とも極めて似ていることから同一個体で壺の底部片である可能性が高い。内面には粗いハケメが施されているが、体部外面は磨耗のため調整不明である。復元底径7.2cmを測る。88は甕の底部片ではないかと思われる。体部外面には粗い縦方向のハケメが施されている。底径7.0cmを測る。

89は甕の口縁部の一部と思われ、端部は面をなし上方に肥厚させる。

90～92は胎土・焼成とも極めて似ていることから同一個体の可能性が高く、90は水差形土器の頸部、91は把手部分、92は体部と思われる。磨耗が激しいが90の頸部付近には縦方向のハケメが残っている。復元頸部径10.4cmを測る。92の外面にはヘラ状工具によると思われる斜め方向のギザミが等間隔に施されている。磨耗が激しいが外面下半の一部に横方向のヘラミガキが残っており、内面下半には縦方向のハケメが施されている。復元体部最大径は24.2cmを測る。

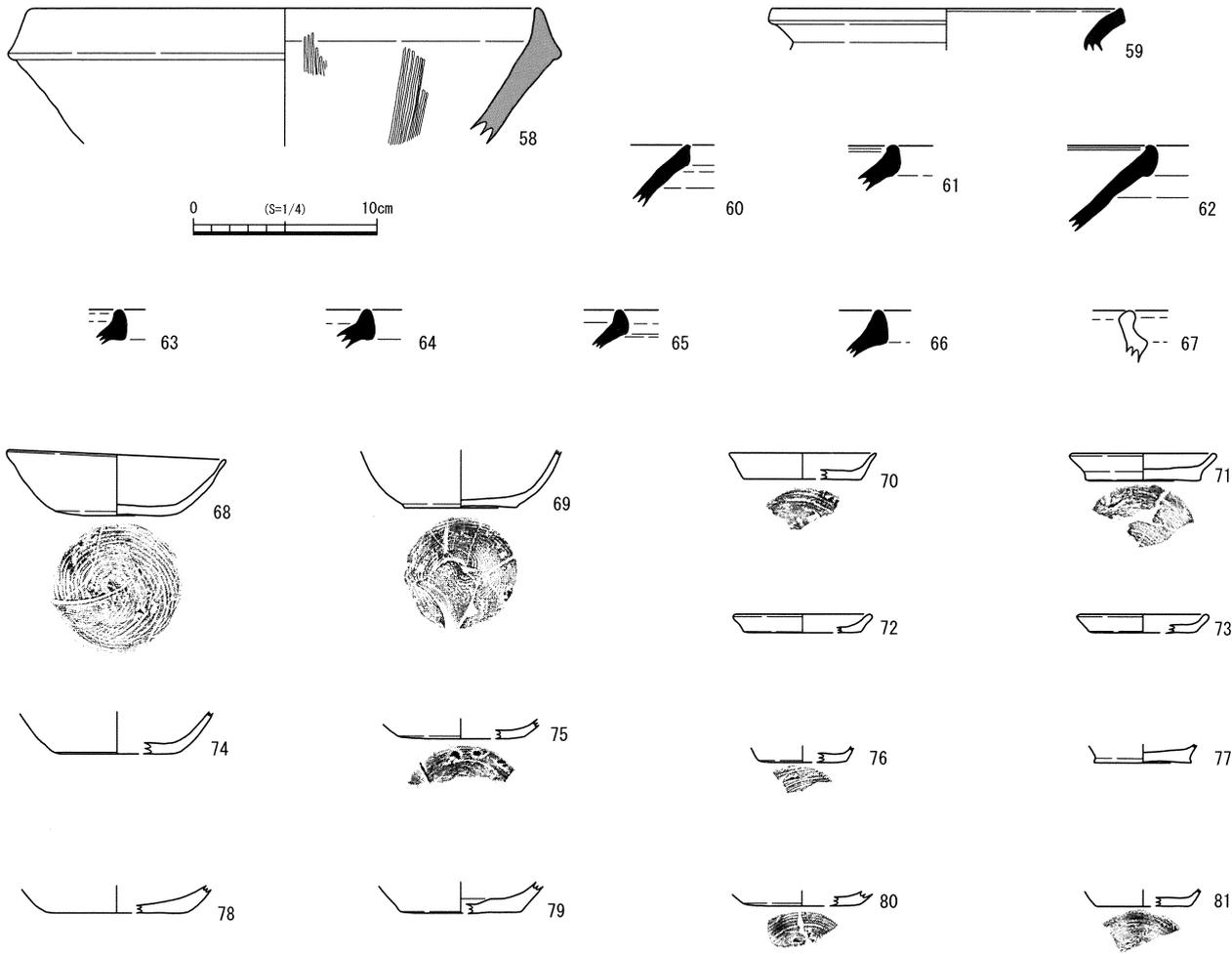


图 22 C-1 地区 包含層出土中世土器

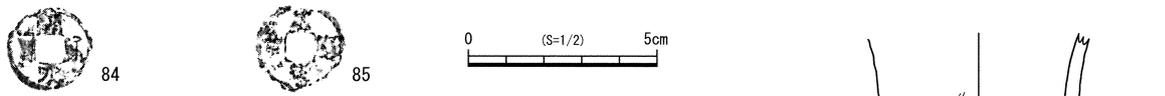


图 23 C-1 地区 遺構 259 出土古銭

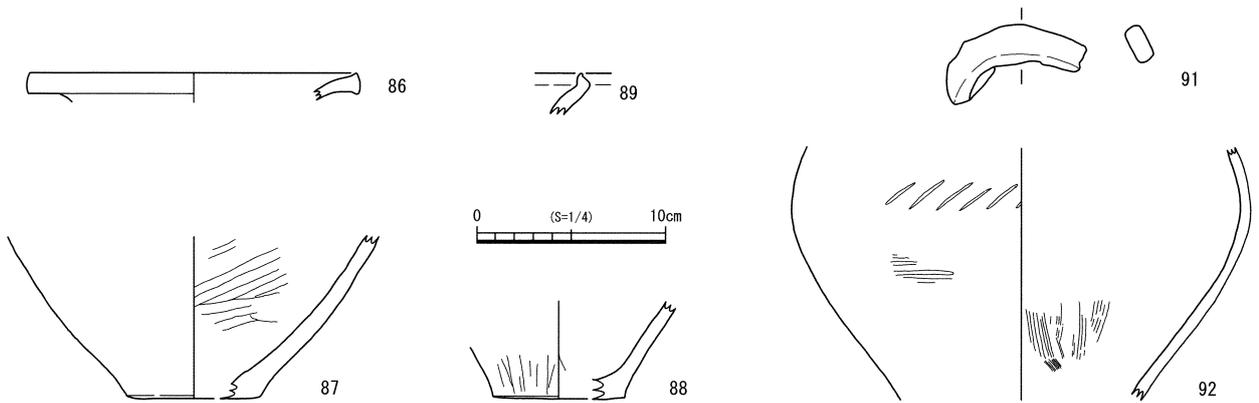


图 24 C-1 地区 出土弥生土器

第4節 C-2地区

遺跡西部に位置し、C-1地区の北側に隣接する調査区である。標高は約63mで、周辺は南から北方向に緩やかに低くなる。調査区の面積は約465㎡である。中世と弥生時代中期後半の遺構が検出された。

1. 層序 (図26)

調査区北部を中心に遺物包含層（南西壁5層）が広がっていたが、出土量はそれほど多くない。また調査区南部は遺物包含層がほとんど残っていない。隣接するC-1地区と遺構面の高低差が30cm以上あることから、特に南部は開発の影響を大きく受けていると推定される。

遺構検出は比較的安定した黄褐色土（南西壁10～12層、南東壁8・9層）の上面で行った。

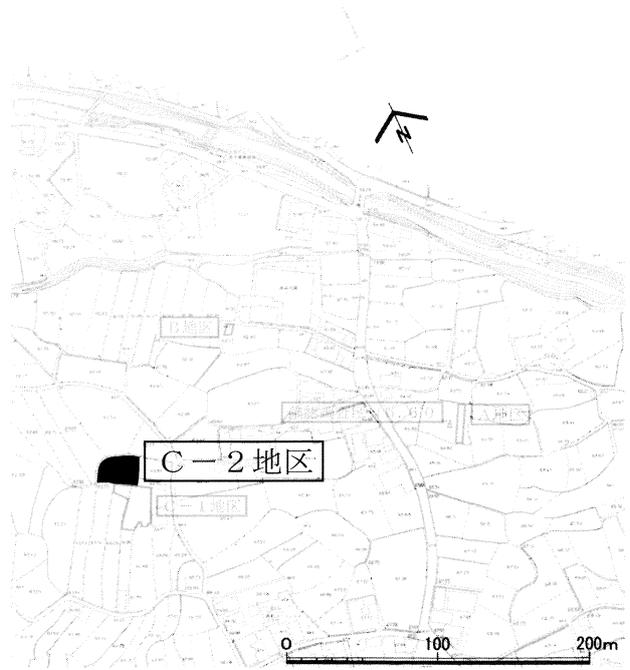


図25 C-2地区の位置

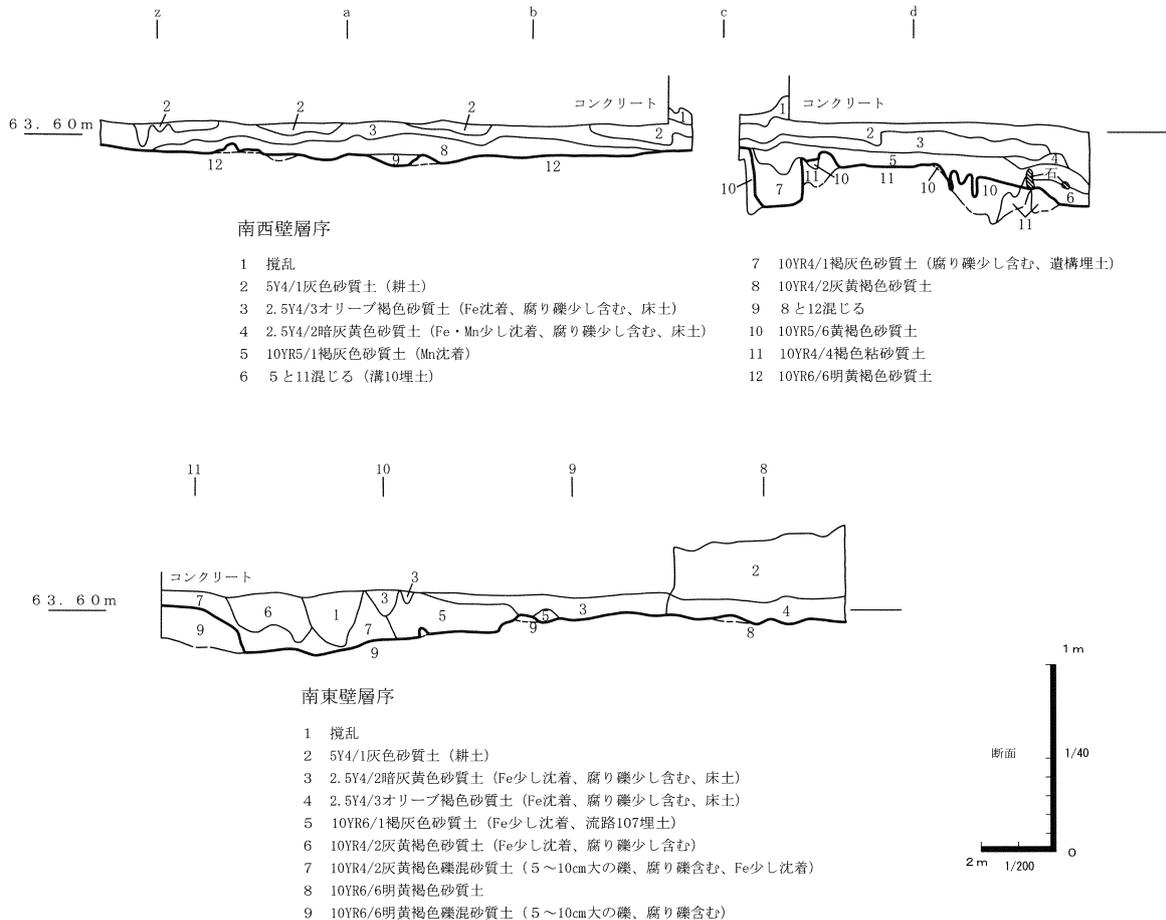


図26 C-2地区 南西・南東壁層序図

2. 遺構 (図27、写真図版12)

中世と弥生時代中期後半の遺構を同一面で検出した。祭祀関係と推定される遺構18の他、柱穴、土坑、溝、流路が検出できた。流路の一部は弥生時代と思われるが、他の遺構はほとんどが中世と思われる。C-1地区と比べて土坑が多く検出され、後述のように埋土の違いから2時期 (I期・II期) にわけることができた。柱穴から建物2棟や柵列が復元でき、隣接するC-1地区とは違った方位を示す。

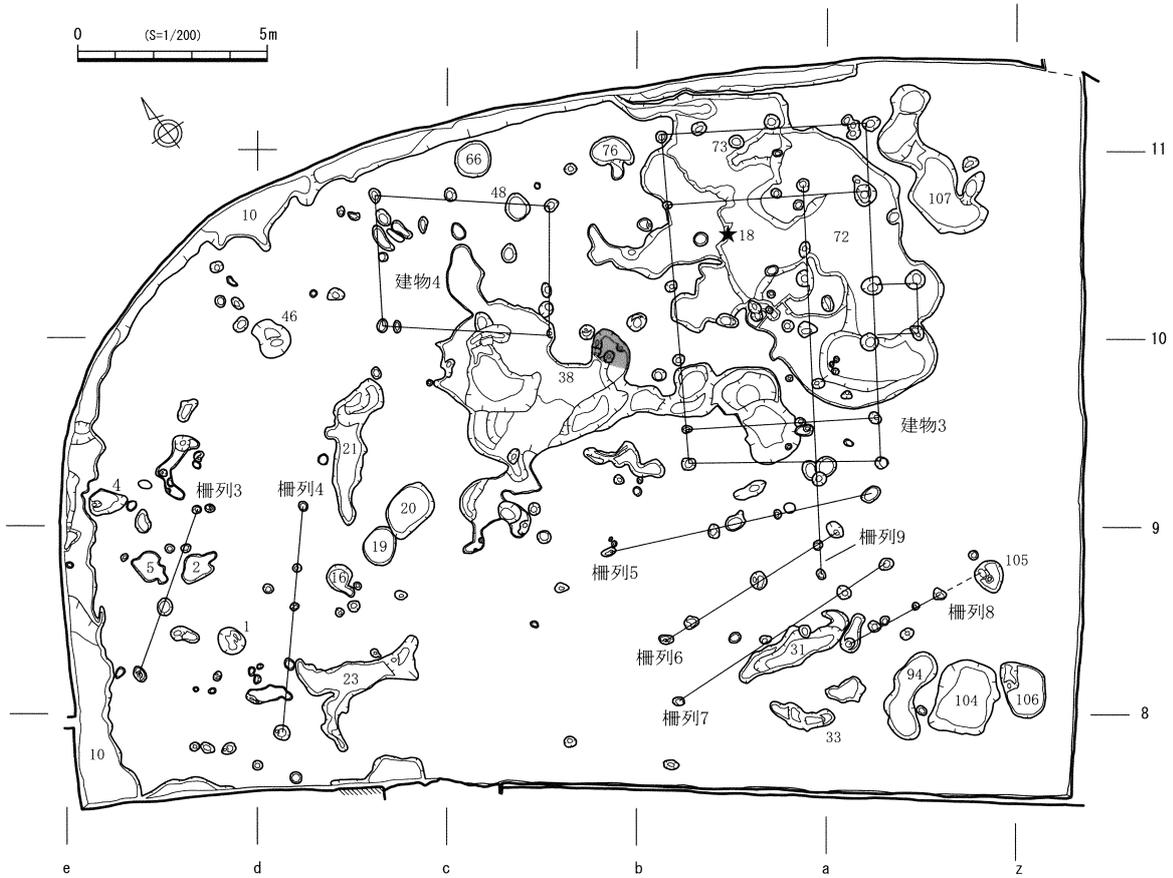


図27 C-2地区 平面図

遺構18 (図28、写真図版13) 検出面直上で土師器皿計5枚が積み重ねられた状態で出土した。皿は正置されているが、上から4・5枚目は斜めに立ったような状態で極めて不安定である。土師器皿1～3枚目には銅銭が1枚ずつ載せられており、土師器皿5枚目の横と下からも銅銭が出土している。また遺構周辺から上記銅銭5枚とは別の細片1点が出土しており、確認できた銅銭の枚数は計6枚である。建物3内部に位置することから、地鎮祭等、この建物と何らかの関わりのある祭祀遺構と思われる。

建物3 (図29) 梁行中央の柱穴の位置が北東側と南西側でずれていることから、梁行2間×桁行3間の側柱建物を母屋部分として、北東・南西側に1間×2間を

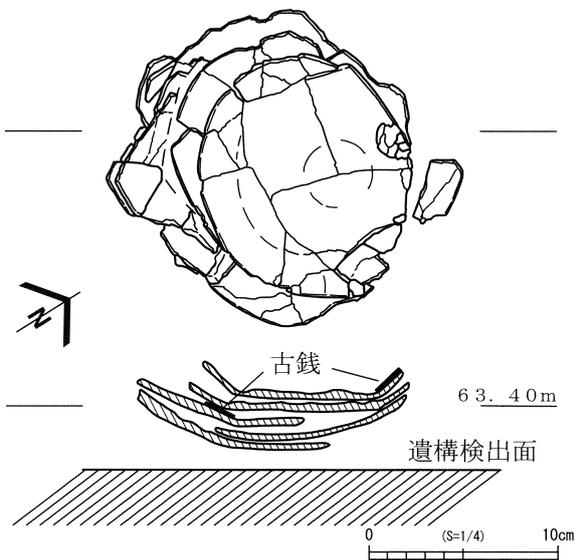


図28 C-2地区 遺構18遺物出土状況平面・断面図

付設したと推定される。南東側にも1間×1間の付属部分が見られる。母屋部分の建物規模は約31.1㎡、付属部分を含めた建物規模は約48.5㎡である。

柱穴から図化できる遺物は出土していない。柱穴埋土は淡灰色を呈するものが多く、後述するⅡ期に対応する時期と思われる。また検出時に柱穴が流路72を切っていることが確認できた。

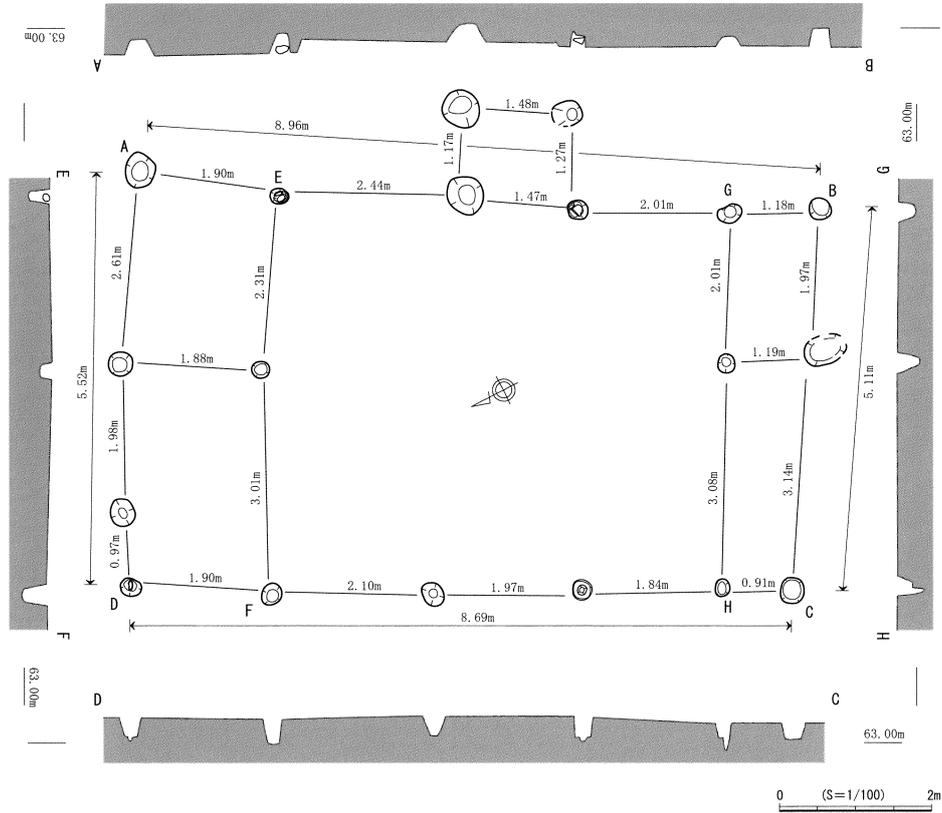


図29 C-2地区 建物3平面・断面図

建物4 (図30) 梁行2間×桁行2間の側柱建物で、柱穴の間隔は不均等である。建物規模は約15.4㎡である。

建物3と近い方位で建てられているが、柱穴埋土が暗灰色を呈するものが多く、後述するⅠ期に対応する時期と考えられ、建物3より古い時期の可能性が高い。柱穴から図化できる遺物は出土していない。

土坑 検出された土坑について一括して述べることにする。土坑1を除いて図化できる遺物は出土していないが、埋土が暗灰色と淡灰色の2種類に分類でき、土坑19と20の切りあいから後者が新しいことが確認できた。前者をⅠ期、後者を

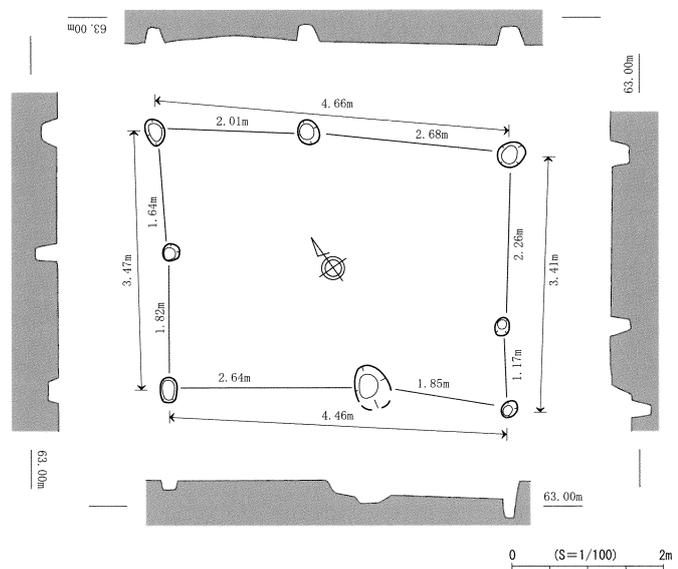


図30 C-2地区 建物4平面・断面図

Ⅱ期とする。Ⅱ期は中世と推定されるが、Ⅰ期については弥生時代と遺構埋土が似ているため、弥生時代の土坑が含まれている可能性は皆無ではない。

規模等は表1に示す通りであるが、Ⅰ期の土坑はⅡ期と比べて規模が小さいものが多く、北部に偏って分布していることから、Ⅰ期の土坑は開発に伴う削平の影響を受けている可能性が高い。

遺構番号	1	2	4	5	16	19	46	48	66	76	105	20	104	106
長径(cm)	75	112	102	98	69	101	106	71	99	113	83	142	193	161
短径(cm)	66	70	71	70	67	87	86	62	92	77	72	101	152	115
深さ(cm)	25	24	21	26	26	32	52	13	20	18	27	33	54	22
時期	Ⅰ期											Ⅱ期		

表1 C-2地区 土坑の規模・時期

柵列 柱穴が不均等な間隔で直線状に並ぶものは柵列と判断した。地区南部の柵列6～8については埋土のほとんどが淡灰色を呈することから、Ⅱ期に対応する時期と思われる。建物3に重複する柵列9と柵列5は埋土が暗灰色を呈することから、Ⅰ期に対応する時期と思われる。

溝10 北東から北西にかけての耕地境界付近で溝状遺構の肩部を検出した。埋土（図26南西壁6層）はⅠ期に似ており、中世の遺物が出土している。後述するように中世に掘削された「井出」（用水路）の一部の可能性はある。

流路状遺構（図31、写真図版12） 流路38は北西～北方向、流路72は北方向に流れていた自然流路の一部で、後世の開発によって削平を受けたと推定される。両遺構ともまとまった弥生時代中期後半の遺物が出土しており、流路38（図27灰色部分）からは甕、流路72からは水差形土器2個体分が出土しており、周辺は水場として利用されていたのではないと思われる。

両遺構からは中世の遺物も出土している。流路38・72の埋土は暗灰色で、弥生時代とⅠ期の中世遺構埋土が同じような色調を呈するため、切りあいが判別できなかったと思われる。

これ以外の流路状遺構については、流路31・33・94の埋土が暗灰色を呈し、流路38・72あるいはⅠ期に対応する時期、流路21・23・107（図26南東壁5層）は淡灰色を呈し、Ⅱ期に対応する時期と思われる。

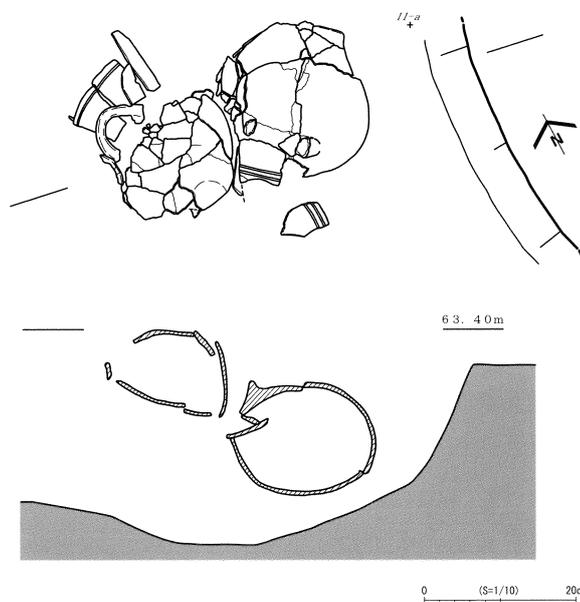


図31 C-2地区 流路72 遺物出土状況平面・断面図

3. 遺物

中世の土器と古銭、弥生時代中期後半の土器が出土している。

(1)遺構出土中世土器・古銭（図32、写真図版14～16）

遺構18 93～97の回転台成形の土師器皿、117～122の銅銭（117・120・122は写真図版のみ）が出土した。土師器皿は93が一番上から出土したもので、以下番号順に上から2～5枚目となる。銅銭は117・118・119は土師器皿の1・2・3枚目に載せられていたもので、120・121は5枚目の横・下から出土、122は出土位置不明である。

93・95・97と94・96では形態・手法等に違いが見られる。後者には体部内外面に多段のロクロナデ痕が残っているのに対して前者には残っていない。また前者の方が器壁は厚く、赤い色調で焼成が甘い。全て底部外面には回転糸切痕が残り、体部は内湾し、口縁端部は尖り気味におさめる。93は復元口径12.0・底径7.3・器高2.4cm、94は口径12.3・底径5.9・器高2.7cm、95は復元口径11.7・底径6.7・器高2.4cm、96は口径12.1・底径6.0・器高2.6cm、97は復元口径13.1・底径7.2・器高2.1cmを測る。

117は天聖元寶（1023年）、118は熙寧元寶（1068年）、119は治平元寶（1064年）、120は付着物のため不明、121は熙寧元寶、122は細片のため不明である。

土坑1 98・99が出土した。98は回転台成形の土師器皿で、底部外面には回転糸切痕が残る。体部は内湾する。口縁部を強くロクロナデして器壁が薄く、端部が少し外反し尖り気味におさめる。口径12.2・底径6.5・器高3.3cmを測る。99は土師器皿もしくは小皿の底部で、底部外面には回転糸切痕が残る。復元底径は5.3cmを測る。

溝10 100・101が出土した。100は回転台成形の土師器皿で、体部は内湾し口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.2cmを測る。101は土製煮炊具の鍋で、体部外内面ともにハケメが施される。口縁部はヨコナデされ「く」字状を呈する。

流路38 103～107が出土した。103は羽釜形タイプの土製煮炊具で播磨型B系列（註2）と思われる。104は東播系の須恵器鉢で、口縁端部を上下に拡張し内側に少し凹みが見られる。復元口径は27.5cmである。

105・106は回転台成形の土師器小皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は105が尖り気味、106が丸くおさめる。105は復元口径6.2・復元底径5.0・器高1.0cm、106は復元口径6.2・復元底径4.9・器高1.0cmを測る。107は回転台成形の須恵器皿で、体部は内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径11.6cmを測る。

流路72 108～116が出土した。108は須恵器皿の底部で、体部は内湾気味に立ち上がる。外面には回転糸切痕が残る。復元底径6.4cmを測る。109は東播系の須恵器甕と思われ、体部外面には細いタタキを施す。口縁端部を上下に拡張し、外側は面をなし、上方内側には凹みが見られる。

110～112は回転台成形の土師器皿、113は土師器皿もしくは小皿、114～116は土師器小皿と思われる。110・111・113・116の底部外面には回転糸切痕が明瞭に残る。110の体部は直線的であるが底部からは内湾気味に立ち上がる。復元底径6.3cmを測る。111の体部は内湾し、口縁端部は丸くおさめる。復元口径9.0・復元底径5.6・器高2.7cmを測る。112の体部は底部から内湾気味に立ち上がる。復元底径7.0cmを測る。113は復元底径6.2cmを測る。114は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径7.0・復元底径5.7・器高1.0cmを測る。115は底部がやや突出する形態である。復元底径6.0cmを測る。116の体部は底部から内湾気味に立ち上がる。復元底径6.3cmを測る。

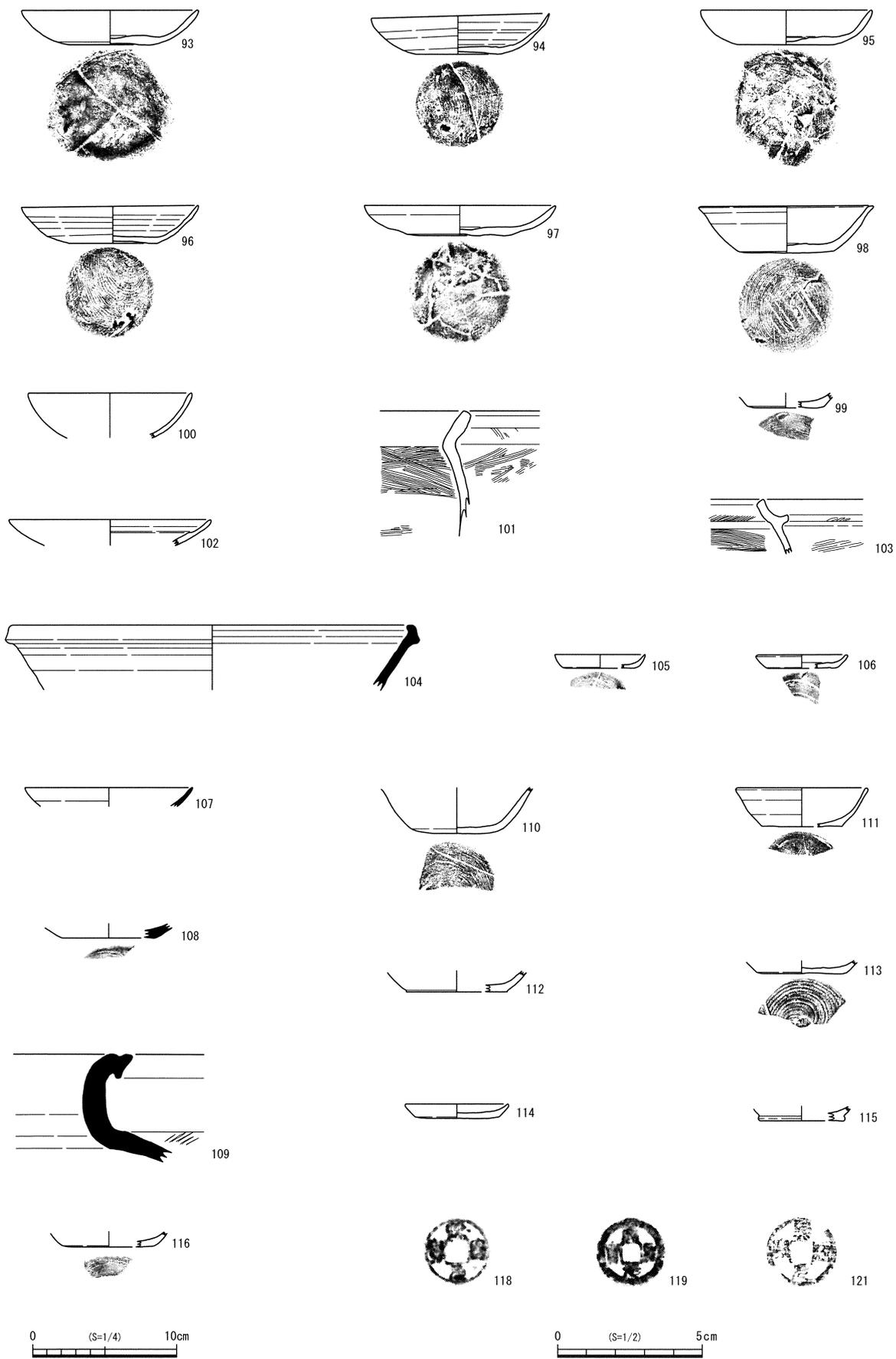


图 32 C-2 地区 遺構出土中世土器・古銭

その他の遺構 102は遺構73から出土した。回転台成形の土師器皿で、体部は少し内湾する。口縁部を強くロクロナデして器壁が薄くなっており、端部は尖り気味におさめる。復元口径13.8cmを測る。

(2)包含層出土中世土器 (図33、写真図版16・17)

123～126は東播系の須恵器鉢である。123～125の口縁部はすべて端部を拡張しており、特に123・125は上方への拡張が顕著である。123の復元口径は26.7cmである。126の復元底径9.6cmを測る。

127は回転台成形の須恵器皿で、口縁部に重ね焼き痕が残る。体部は少し内湾し、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径は11.7cmを測る。

128～131は回転台成形の土師器皿、132は土師器小皿と思われる。128・129・130・132の底部外面には回転糸切痕が明瞭に残る。131を除き、体部は内湾気味に立ち上がる。128の体部は直線的で口縁端部を丸くおさめる。復元口径11.6・復元底径6.8・器高3.1cmを測る。129は底径6.7cm、130は復元底径5.4cm、131は復元底径6.2cm、132は底径5.6cmを測る。

133～139は土製煮炊具である。133は鍋の口縁部で「く」字状を呈し内湾する。口縁端部は面をなす。復元口径は22.9cmを測る。134～139は羽釜形タイプの土製煮炊具で播磨型B系列(註2)と思われる。134の復元口径は22.0cm、135の復元口径は21.0cm、136の復元口径は24.6cmを測る。

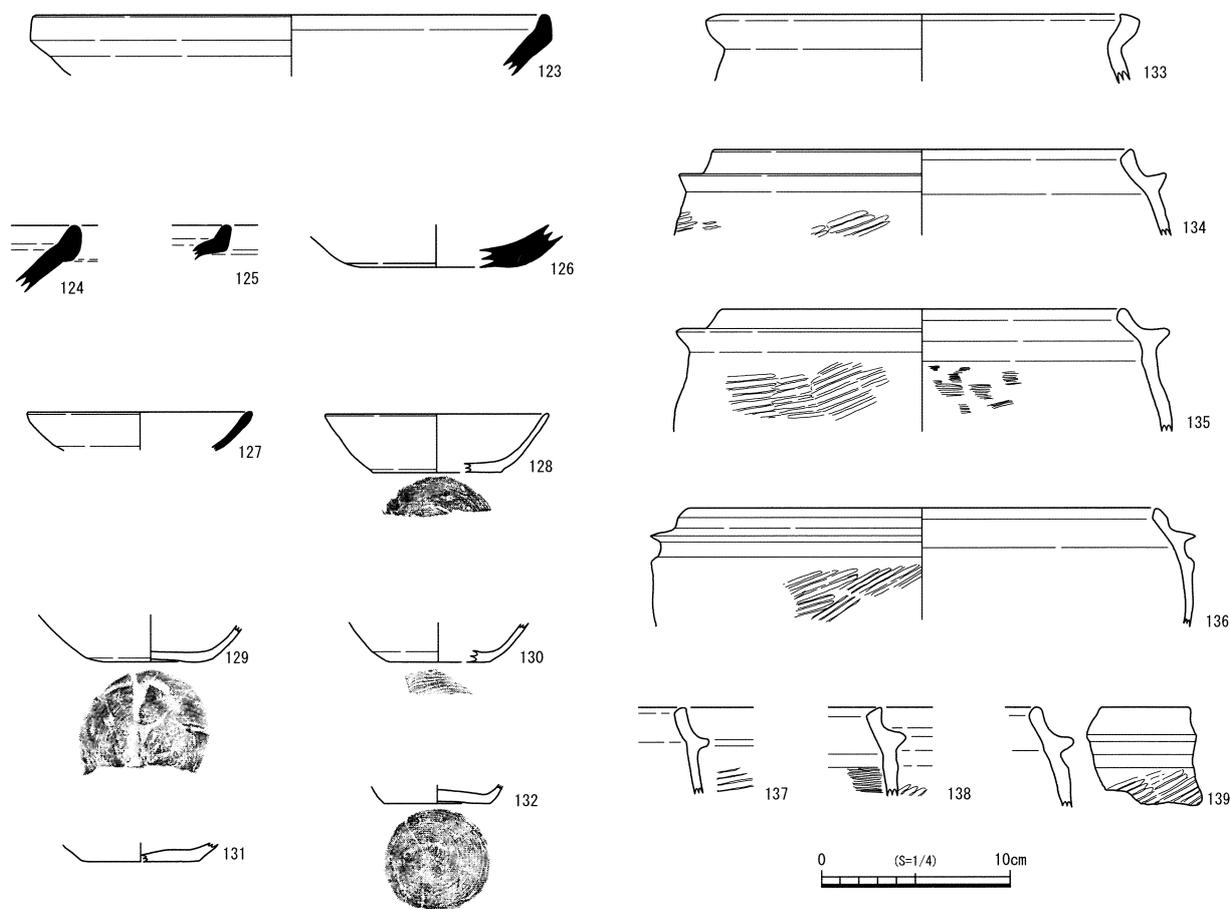


図33 C-2地区 包含層出土中世土器

(3)弥生土器 (図34、写真図版18)

140～142は遺構38、143・144は遺構72、145～149は包含層から出土した。弥生時代中期後半と思われる。

140～142は近辺(図27灰色部分)から出土しており、胎土・焼成とも極めて似ていることから同一個体の可能性が高く、140は甕の口縁部、141は体部、142は底部と思われる。140の口縁部は水平方向に屈曲し、端部は面をなし上方に少し拡張する。口縁部をヨコナデする他は磨耗が激しく調整不明である。口径15.2・頸部径13.2cmを測る。141の体部は倒卵形を呈し、外面上半にヘラ状工具によると思われる斜め方向のキザミを等間隔に施している。全体に磨耗が激しく調整がわかりにくいだが外面下半はケズリ後、ハケメを施しているのではないかと思われる。復元体部最大径は約21.4cmである。142は磨耗が激しく調整がわかりにくい、体部外面にはわずかに縦方向のハケメ、内面には横方向のハケメが残っている。底径は約6.2cmを測る。

143・144は一括出土(図31)の水差形土器である。143は特に外面の磨耗が激しく調整がわかりにくい、口縁には細い凹線が2条確認できた。内面下半には縦方向のハケメが施されている。口径9.9・頸部径7.7・体部最大径16.0・底部径6.2、器高22.5cmである。144の口縁部には凹線が3条施されている。144の外面中位には横方向のヘラミガキ、下半には縦方向のヘラミガキが、内面上半には横方向のハケメ、中位から下半にかけては縦方向のハケメが施される。口径9.8・頸部径9.2・体部最大径19.4・底部径6.2・器高25.3cmを測る。

145は甕の口縁部である。口縁は体部からほぼ直角に屈曲し、端部は面をなし上方に少し拡張する。磨耗が激しく調整は不明である。復元口径22.3・復元頸部径19.2cmを測る。

146は鉢の口縁部である。端部近くに凹線2条が施され、端部は丸くおさめる。外面は横方向に内面は斜め方向に粗いヘラミガキが施される。復元口径22.1cmを測る。

147は甕の底部と思われる。内外面とも磨耗が激しく調整不明である。底部径6.4cmを測る。

148は水差形土器の上半部である。口縁には凹線4条が施されており、体部外面には縦方向のハケメが施されている。口径10.0・頸部径9.5cmを測る。

149は高坏である。坏部は内湾し、緩やかに屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。坏部外面の稜より上は横方向のヘラミガキ、稜より下は縦方向のヘラミガキ、坏部内面は横方向のヘラミガキが施されている。坏部と脚部の境の充填部分は剥離している。脚部内面には絞り痕が残る。口径15.8・基部径4.0cmを測る。

第3章の註

1. 乗岡 実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』2000
2. 岡田章一・長谷川眞「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要 第3号』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003

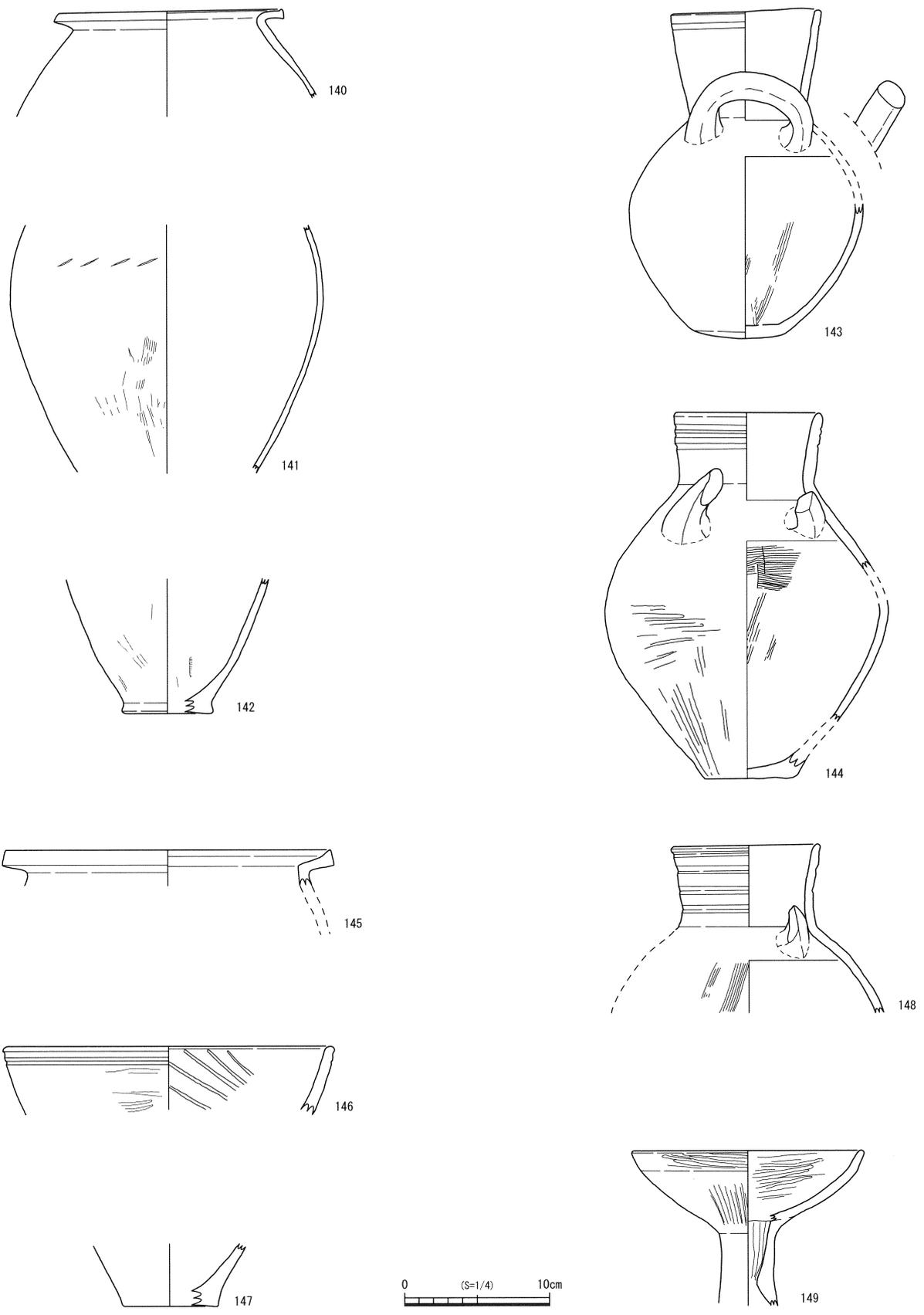


图 34 C-2 地区 出土弥生土器

第4章 高萩地区の水利調査

水利調査は現地での調査と聞き取りによる調査を行った。聞き取り調査は主に地元の久米氏と坂口氏によるものである。

通常灌漑の水源には湧水、河川、溜池、井戸などがあるが、高萩地区の水源は応永2（1395）年以前に築造されたとされる（『味地草』）南東部にある正木池（溜池）が主流となる。正木池からは基本的に2本の中心となる大きな「井出」（用水路）が走る。一つは南川井出で高萩地区の南方を東から西に向かって走る。もう一つは本井出（通称ホンビ）である。さらに後者の本井出は途中から北の井出・ハンダ井出とそれぞれ名称を変えながら福井地区の方に流れる。この2本の大きな井出は各圃場に水を送る規模の小さな支線である井出とは区別して本線と呼ばれる。この内、北の井出には独自に名称を持つ四分一井出、ジデン井出、北ノ内井出と呼ばれる支線が取り付く。

また本井出には西の福井地区に水を送る新井出が接続する。この新井出の水は高萩地区の集落内を通るものの、1296番地（小字東所）1筆の圃場を除いて、同地区では一切使用されず、福井地区のみで使用される。ここで注意されるのが、南川井出と本井出の正木池に接続する部分の樋の高さが違うことである（南川井出が高く、本井出が低いところにある）。この高低差は、正木池の水の有効利用と同時に高萩地区内の土地開発（水田開発）の時期差を暗示する様にも思える。

次に井戸の分布で注意されるのが、小字北ノ内の北西部周辺に集中することである。聞き取り調査では、この周辺の水田は水持ちが悪く、水不足の時は井戸から水を供給するとのことである。

また河岸段丘下にある地域（小字井手ノ下周辺）では荒水（一番初めに水を入れる時）は四分一井出から水をとるものの、差水（その後の水の補給）は「出湧」（湧水）から行うということである。



高萩地区遠景（南東より、手前のため池が正木池）

井手名	面積	備考
南川井出	約8町	
本井出（ホンビ）	約2町	
北の井出	約8～12町	
四分一井出	約4町	北の井出の支線

表2 高萩地区内各井出の水田面積



ジデン井出（左）と北ノ内井出（右）の分岐部分（南より）

第5章 総括

第1節 中世

1. 中世の遺構について

A地区とC-1・2地区で中世の遺構が検出できた。特にC-1・2地区では、計4棟の掘立柱建物や土坑等が検出され、中世の高萩集落の一部を明らかにすることができた。特に建物1は孫廂まで備えた立派な建物で、総床面積は約65.4㎡とかなり大きな規模となる。集落内の有力者の屋敷と考えると間違いないと思われる。

中世の遺構の時期差を考える上で、C-2地区の土坑が埋土の違いからⅠ期とⅡ期に分類できたこと、また土坑以外の遺構についてもⅠ・Ⅱ期に分類可能なものがあったことは大きな成果であった。第3章で述べたことを、もう一度ここで整理しておくことにする。Ⅰ期は弥生時代の遺構を含む可能性があるが、C-2地区の土坑1・2・4・5・16・19・46・48・66・76・105、建物4、柵列5・9、流路38・72・31・33・94、溝10、C-1地区の中世の遺構についてはすべてⅠ期と思われる。Ⅱ期に属する遺構は、C-2地区の土坑20・104・106、建物3、柵列6～8、流路21・23・107、遺構18は埋土不明であるが、後述するように出土土師器皿の特徴からⅡ期に属すると思われる。

Ⅰ期のC-1地区周辺は、建物1を中心とした屋敷地であったと考えられる。建物2の出土遺物は建物1よりやや新しい様相が見られるものの、建物1を囲う柵列が建物2と重複していないことから、建物1に併設された可能性も捨てきれない。またC-1地区にⅡ期の遺構が見られず、包含層にⅡ期に属する遺物がほとんど含まれていないことから、Ⅱ期に到るまでに耕地化された可能性が極めて高い。おそらく建物の廃絶後、切土、盛土を行って耕地化されたと推定されるが、土坑15はその作業の際に不要な礫等を廃棄したり、建物の廃材等を焼却する目的で掘削されたと思われる。

Ⅰ期のC-2地区周辺は、自然流路が流れる荒廃地であったと思われる。土坑1からは比較的残りの良い土師器皿が出土しており、土葬墓の可能性もある。やがて「北ノ内井出」の一部と推定される溝10が掘削され、流路38・72等の自然流路を埋め戻し、切土、盛土を行って屋敷地として整地していったと推測される。流路38の埋め戻し後に建物4が建てられるが、整地完了後のⅡ期にほぼ同じ方位で規模の大きな建物3が建てられている。建物4の存続は極めて短期間と推定され、整地作業のための一時的な作業小屋であったのではないかとと思われる。Ⅱ期の遺構は屋敷地の整地完了後に展開すると推定される。Ⅱ期の遺構18は建物3に伴う祭祀遺構、あるいは屋敷地の整地との関わりも考えられるので整地作業に伴い祭祀を行ったという見方も可能であろう。いずれにしても地鎮を目的としたものであったに違いない。

2. 中世の遺物について

土器と古銭が出土しており、土器は土師器・須恵器・瓦器・陶磁器が出土している。土器の構成割合(註1)を見ると土師器(76.2%)が極めて多く、その次を須恵器(19.7%)が占めており、陶磁器(2.5%)・瓦器(1.6%)はごくわずかで、日常雑器は基本的に土師器・須恵器で構成されていたと推定される。

瓦器 淡路島は和泉型瓦器塚の影響を大きく受けている地域で、尾上編年Ⅲ期(註2)前後は日常雑器として非常に高い割合を占める。しかしⅣ期の高台が消失した段階については出土例が極めて少なく(註3)、Ⅳ-2・3期以後、瓦器は急速に衰退していくと推測される。当調査では時期の明確な資料は出

土していないが、出土数が極めて少ないことから衰退期頃と思われる。

陶磁器 図化できたのは58の備前焼鉢のみで、15世紀前半頃と考えられる。鉢については後述のように東播系須恵器がより多く出土している。

特に有力者の屋敷とした建物1周辺で輸入陶磁器が出土しなかったのが気にかかるが(註4)、流通量の少ない時期に当たるためと思われる。

土師器 供膳容器については、確認できたものは全て回転台成形によるもので、手づくねで成形されたものは確認できなかった。手づくねが皆無に近い割合を示すのは、淡路島南部の供膳用土師器の特徴である(註5)。

供膳容器について、器高が3cm前後のものを皿、1cm前後のものを小皿とした(註6)。皿は口径が14.1cm以下で12cm前後のものが大半である。底径は7.8cm以下で6～7cmが大半である。小皿は口径が7.8cm以下で、底径が6.4cm以下となる。

次に時期の前後関係と全体の法量(復元値を含む)がわかっている皿について述べたい。C地区のI期の皿として土坑1出土98、建物1柱穴出土33・34があげられる。II期は遺構18出土の93～97をあげることができる。相対的に、①II期の皿は器高が低く、体部の傾きが緩やかである。②II期は器壁が薄いものと厚いものにわかれる。I期は口縁部のみ器壁を薄く仕上げたものが存在するが、底部周辺は総じて器壁が厚い。③I期の口縁端部は丸くおさめるものが多いが、II期は尖り気味のものが多い。等の違いが見られる。

①についてさらに詳しく述べると、表3の外傾係数(註7)の減少にもあらわれているように、I期からII期へ体部の傾きが緩やかになっていく変化があると推定され、基本的には口径・底径の変化に比べて器高が低くなる変化が大きいために引き起こされる現象と捉えている。I期の特に出土98は谷町筋遺跡出土の14世紀中葉～後葉と報告されている北地区土坑20出土土師器皿に近い数値を示し、II期の遺構18出土93～97は谷町筋遺跡出土で15世紀中葉～後葉とされる南地区土坑24出土土師器皿や15世紀末～16世紀前葉とされる東地区建物10柱穴出土遺物に近い数値を示す。I期の建物1柱穴出土33・34土師器皿は前者よりの数値を示す。資料数が非常に少ないことを考慮するとやや不安要素があるが、14世紀～15世紀にかけて、外傾係数の平均的な数値が1以上から0.9以下へ移行していきと考えたい。

また94・96のように内外面にロクロナデの跡(ロクロメ)を明瞭に残すものは、上記の谷町筋遺跡出土土師器皿には認められないが、^{かのど}叶堂城跡出土の土師器皿に同じ特徴をもつものが含まれる。叶堂城跡瓦窯出土の土器(註8)は、やや時期差を認めるものの、多くは14世紀後半～15世紀前半にかけてとされており、これらの比較資料から14世紀後半頃～15世紀代にかけて上述のような形態的な変化がおこったと推定される。

谷町筋遺跡との比較から現時点では、土坑1出土98が14世紀後葉頃、建物1柱穴出土33・34は14世紀末～15世紀初頭頃、遺構18出土93～97は15世紀中葉頃と考えておきたい。また上にあげた皿以外で、I期に属する建物2柱穴出土37や遺構10出土100は、体部の傾きはI期に近いが、器壁が薄く、口縁端部が尖り気味で、両時期に通じる中間的な様相をもっていることから、これらを15世紀前葉頃と考えておきたい。

A地区出土の土師器皿1・2については、体部の傾きが緩やかで口縁端部が尖り気味、2は器壁が薄くII期以降の時期と推定される。

小皿はさらに良好な資料が少なく様相が掴みにくいが、皿と同様、口縁端部が尖り気味のものが時期を追って増えていくのではないかと推定される。

遺跡名	出土遺構	遺物番号	法量 (cm)			外傾係数
			口径	底径	器高	
谷町筋	北地区土坑20	826	11.8	5.7	3.0	0.984
		831	11.8	6.1	3.5	1.228
		832	11.8	6.5	3.7	1.396
		833	12.2	6.2	3.7	1.233
		平均値	11.90	6.13	3.48	1.210
高萩	C-2地区土坑1	98	12.2	6.5	3.3	1.158
高萩	C-1地区建物1柱穴	33	12.0	6.3	3.0	1.053
		34	12.6	7.0	2.8	1.000
		平均値	12.30	6.65	2.90	1.027
高萩	C-2地区遺構18	93	12.0	7.3	2.4	1.021
		94	12.3	5.9	2.7	0.844
		95	11.7	6.7	2.4	0.960
		96	12.1	6.0	2.6	0.852
		97	13.1	7.2	2.1	0.712
		平均値	12.24	6.62	2.44	0.868
谷町筋	南地区土坑24	903	12.4	6.1	2.6	0.825
		904	12.3	6.0	2.5	0.794
		905	12.8	7.3	2.2	0.800
		906	12.5	6.9	2.5	0.893
		平均値	12.50	6.58	2.45	0.828
谷町筋	東地区建物10柱穴	890	12.0	5.9	2.5	0.820
		891	11.8	5.1	2.4	0.716
		892	11.8	6.1	2.5	0.877
		893	11.7	5.6	3.0	0.984
		平均値	11.83	5.68	2.60	0.846

表3 土師器皿の法量と外傾係数

煮沸容器についてはC地区の包含層から播磨型の土製煮炊具（註9）がC-2地区を中心に多数出土しており、134～139の羽釜形タイプはおおよそ15世紀前半頃ではないかと思われる。また101の鍋は、先述した叶堂城跡瓦窯出土遺物の中に、同様の形態・調整のものが含まれている。これらは比較的磨耗も少なく、建物4等で使用されたものが多く含まれているのではないかと思われる。

須恵器 供膳容器は皿のみで小皿は確認できなかった。皿の体部はすべて内湾し、直線的なものは確認できなかった。口縁端部は尖り気味のものも多く、器壁が薄いなどⅡ期の土師器皿により共通する要素が見られる。すなわちⅠ期からⅡ期への土師器皿の変化の背景には須恵器皿生産の何らかの影響が

あったのではないかと思われる。

供膳容器は他に東播系と思われる鉢がC-1地区を中心に出土している。ほとんどが口縁端部を上下に拡張し、13世紀後半～14世紀頃と思われる。

貯蔵容器の出土は少なく、109の甕が東播系と思われる。

3. 高萩遺跡の中世集落の性格について

当調査や確認調査の出土遺物から、高萩地区周辺の開発は中世初頭にはまだはじまっておらず、13世紀後半～14世紀前半頃にはじまったのではないかと推測される。三原平野でも比較的开发の遅い地区で、前述のように扇状地特有の土壌と水利の条件の悪さが高萩地区の開発を阻んできたのであろう。

再び遺跡周辺の風景に目を向けると、C地区の立地する小字「開発^{かいほつ}」には南北方向に細長い棚田状の区画が多く見られ、中世的景観が色濃く残っていることに気付く。さらに「開発」周辺ではハンダ井出とジデン井出、ジデン井出から北ノ内井出と次々に井出が分岐していくことから、「開発」一帯の耕地に水を送ることが極めて重要であったことが看取できる。すなわち「開発」周辺の耕地開発と井出の整備は中世の開発当初から非常に密接な関係があり、高萩地区の耕地開発および農業生産の中心であったと推測される。ここが開発の中心であった理由もC地区や確認調査の結果から明らかになってきた。すなわち比較的確が少なく、扇状地の中では比較的安定した土壌が広がっていること、加えて自然流路があり、井出の未完成時においてもこれを水利として利用できた可能性があるからである。そして井出が完成すると「開発」周辺の農業生産は安定し、支線を分岐させることにより、より広範囲の開発が可能となっていったに違いない。

さらに重要なことは、新井出が西の福井地区の方に流れていくことから、井出の整備は高萩地区のみならず福井地区を含む極めて大きな事業であり、おそらく両地区の有力者が何らかの形でこの事業に携わっていたと推測されることである。

ここで井出における水利上の重要地点について考えてみたい。正木池の取水口や井出の分岐点はその重要地点であるが、その分岐点の中でも「開発」周辺の分岐の端緒になるハンダ井出とジデン井出の分岐点(図35⑤)は最も重要な分岐点の一つとすることができよう。注目されるのは、その分岐点の周囲に「久米氏」宅が存在することである。現在の「久米氏」がいつの時代からここに住んでいたかは不明であるが、次に述べるように中世の国人「久米氏」の末裔である可能性が極めて高いと思われる。

護国寺文書の文明2(1470)年の結番定書には、番役が割り当てられた村とその代表者の名が記載されている(註10)。これによると「久米氏」は「法花寺村」、すなわち今の福井地区の有力者であったと思われる。「高萩村」は「下総殿」となっていて、「久米氏」と高萩地区の直接的な関わりを明らかにすることはできないが、福井地区の有力者である「久米氏」が高萩地区と何らかの関わりをもっていたことは上述の井出のあり方から考えて間違いない。その後、慶長・元和年間(1596～1624年)には「高萩村」と「法花寺村」が合併して「原村」になるが、あるいはこの一村化も「久米氏」の動向と何らかの関わりがあるのかもしれない。

長禄2(1458)年の護国寺文書では、「久米四郎右衛門」が賀集八幡宮に他の国人と連名で寄進を行っている。この国人のうち「賀集氏」・「栗井氏」・「近藤氏」については、結番定書にも登場し、それぞれ他の寄進文書も残している。こういった寄進文書は応永年間(1394～1428年)に多く見られ、その時期に護国寺が国人達の信仰対象の中心的役割を担っていたためとされている(註11)。しかし理由はそれ

だけではないように思われる。井出の水源となる正木池の築造が応永2（1395年）以前とされることから、井出の整備やそれに伴う新しい耕地開発が盛んに行われた時期は寄進文書の多い時期と重なってくる。これは決して偶然の一致ではなく、「久米氏」等の国人達が競って開発を行い、その一部を寄進することによって護国寺を自らの後ろ盾としていった事実を物語っているのではないかとと思われる。

国人達は新たな耕地を得るために荒廃した耕地や荒野等を開発していく訳であるが、「久米四郎右衛門」は応永29（1422）年と同31（1424）年には2通の年貢米の引文を護国寺文書に残している。「久米氏」のように勢力基盤の拡大を志向する国人ほど、開発を急ぐあまり、結果として旱魃等の影響を受けやすい悪条件の耕地を多く抱え、年貢の減免と言うツケがまわってくることも少なくなかったのではないかとと思われる。

C-1地区建物1は孫廂を備えた立派な建物であるが、柱穴出土遺物が示す年代は14世紀末～15世紀初頭頃で、このような建物があらわれた要因として正木池の完成と主要な井出の整備により「開発」周辺の農業生産が安定してきたことがあげられよう。C-2地区溝10は北ノ内井出の一部と考えられるが、建物1に居住する有力者はさらなる耕地開発のために北ノ内井出の支線を整備していったのではないかとと思われる。建物1・2廃絶後のC-1地区の耕地化、あるいは荒廃地であったC-2地区の整地作業も、この耕地開発と一体のものであった可能性が高い。

C地区の遺構群が上述のような時代背景、すなわち14世紀末～15世紀にかけて盛んに行われた国人による耕地開発と密接に関わりあっていることは明らかであろう。建物1を「久米氏」の屋敷とするには物的証拠が不足していると言わざるをえないが、国人ないし国人の下で開発を行っていた者の住居と考えて間違いのないように思われる。当調査成果が中世文書を補完し、地域史を明らかにするための一助となれば幸いである。

第4章第1節の註

1. 当調査におけるそれぞれの出土数は、土師器93、須恵器24、陶磁器3（国産陶器1＋輸入磁器2）、瓦器2である。
2. 尾上 実「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器塚—」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会1985
3. 数少ない出土例の一つであるが、九蔵遺跡では回転台成形された高台の無い瓦器塚（『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』南あわじ市教育委員会2010）が出土しており、衰退期における和泉型瓦器塚の影響については不明である。
4. C-1地区の遺構11から青磁片1点、C-2地区の包含層から白磁片1点が出土した。
5. 淡路島北部では手づくねの土師器皿が一定割合で出土していることから、淡路島でも南北では様相が違うようである。
6. 『谷町筋遺跡』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1990 この報告書では14世紀中葉から16世紀前葉頃の出土土師器について、器高2.5cm前後を皿、それ以上のものを塚、外上方へ真っ直ぐ立ち上がるものを坏と分類する。当調査では分類を行うのに十分な出土量が得られなかったこともあり、皿の呼称で統一した。ただし文章中にも述べたように、器高の高低については時期的な要因も作用していると思われる。
7. 外傾係数 = 器高 ÷ {(口径 - 底径) ÷ 2}
8. 『叶堂城跡』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1992
9. 岡田章一・長谷川眞「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要 第3号』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003
10. 菊川兼男「第八編第二章第三節 賀集荘と賀集八幡宮」『三原郡史』1979
11. 今井恒次「護国寺文書にみられる寄進状とその地名について」『護国寺誌』1996

第2節 弥生時代

1. 弥生時代の遺物について

B地区からは竪穴住居と思われる遺構を中心に、弥生時代後期前半頃と思われる遺物が出土した。甕については、4のみが体部の調整を知る資料であるが、外面はタタキ後上半にハケメが、内面には縦方向のケズリ痕が明瞭に残っていた。南あわじ市域では今のところ類例を見つけることはできないが、淡路島北部では楠本下林遺跡土坑SK-201出土甕(註1)の体部に同じ調整方法がとられている。4を含めてほとんどの口縁部が「く」字状で、端部に面が形成されている。また6は口縁端部の面に凹線が確認されたが、それ以外は確認できなかった。底部はドーナツ状を呈するものはまだ現れない段階のようである。これら甕の特徴から後期前半で間違いないと思われるが、さらに体部外面のハケメや口縁端部の凹線の省略化が進んでいると推定されることから、後期前半でもやや新しい傾向が伺える。

C地区からは自然流路等から弥生時代中期後半頃と思われる遺物が出土した。特に水差形土器の出土が目立ち、水場として利用されていたと推定される。143・144・148や146(鉢)の口縁部には凹線が多条施されており、IV様式的な様相を示す(註2)。

2. 弥生時代の遺構について

竪穴住居と思われる遺構の検出によって、B地区周辺で弥生時代後期前半頃の集落が形成されていたことが明らかになった。弥生時代中期後半の住居跡は検出できなかったが、C-2地区の自然流路を水場として、それ程離れていない場所に居住域があったと推定される。

B地区の竪穴住居は、8～9m程度という推定規模に誤りが無ければ、床面積50㎡以上の大型住居と呼べる規模である。ただし集落の規模は、確認調査(註3)の結果から非常に小さかったと推定される。

3. 高萩遺跡の弥生集落の性格について

検出遺構によって確認することはできなかったが、上述のように高萩遺跡は弥生時代中期後半頃に成立した可能性が高く、確認調査(註3)では弥生時代後期後半の遺物も出土している。ただし中期後半から後期後半まで集落が絶えず続いていたと考えるには検出遺構や出土遺物が少なすぎると思われ、時期によって位置を変えながら断続的に小集落が営まれたと推定される。

同じ大日川水系には弥生時代中期～終末期の拠点集落と予想される神子曾遺跡(註4)が標高30m前後の低平な場所に立地し、神子曾遺跡を俯瞰できる高台に標高62～64mの高萩遺跡と標高約78mの柵つノ木遺跡(註5)が立地する。柵つノ木遺跡も小集落と推定され、高萩遺跡では確認できなかった弥生時代終末期の遺構が検出されている。すなわち神子曾遺跡を母集落として、これを俯瞰できる高台に高萩・柵つノ木遺跡の小集落が成立したと推定され、断続的であるのは神子曾遺跡の動向によって必要時のみ集落が営まれたためと推定される。

洲本市域においては拠点集落である下内膳遺跡の成立後、地震と洪水といった自然災害を契機として先山山麓の高所に森・大森谷・中津原遺跡が成立すると考察されており(註6)大いに参考にすべき意見である。ただし神子曾遺跡と下内膳遺跡は拠点遺跡として遜色ない規模であるが、森・大森谷・中津原遺跡と比較すると高萩・柵つノ木遺跡は非常に規模が小さいことを考慮する必要がある。

淡路市域では弥生時代後期になると標高100～200mに位置する遺跡が爆発的に増加する現象が報告

されており、近年、鉄器生産との関わりで新聞等に大きく取り上げられた五斗長垣内遺跡もそのような遺跡の一つである。

南あわじ市域においては弥生時代後期前半の高所に位置する遺跡がこれまでほとんど報告されていないことが一部では問題視されていた。今回、その資料不足と言える時期の報告が行えたことについては大きな意義があったといえる。今後さらに類例が増加すれば、遺跡の性格やその成立の原因となった時代背景、また淡路島における地域的な違いなどもより明らかとなっていくに違いない。

第4章第2節の註

1. 『楠本下林遺跡』東浦町教育委員会1997
2. ただしB地区周辺の確認調査(註3)では、櫛描文が施された土器片が出土している。
3. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』南あわじ市教育委員会2009
4. 『平成16年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2006
5. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』南あわじ市教育委員会2008
6. 『中津原遺跡』兵庫県教育委員会・洲本市教育委員会2003

写真図版 1



調査地遠景（東より）



A 地区調査前近景（南より）



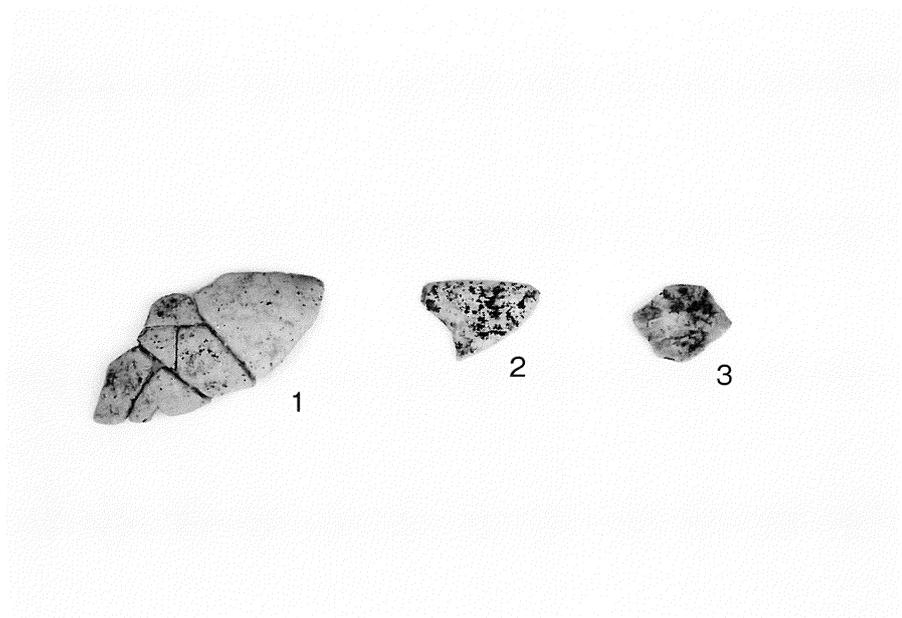
C 地区調査前近景（東より）



A 地区全景 (南西より)

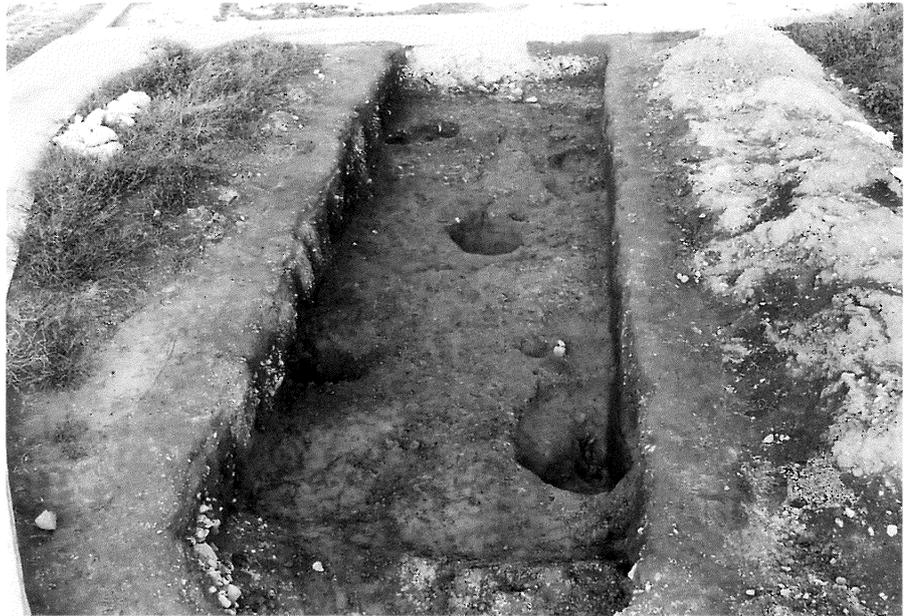


確認調査区 No.60 (南西より)



A 地区・確認調査区 No.60
出土中世土器

写真図版 3



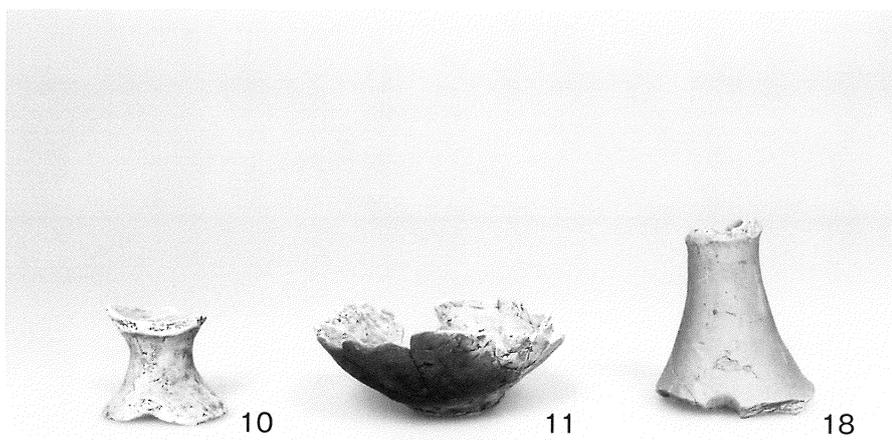
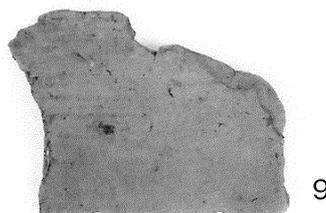
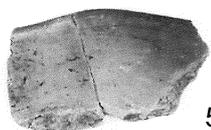
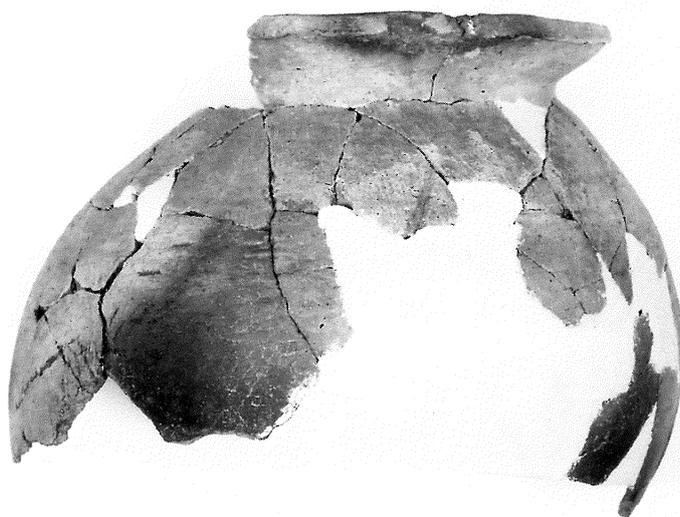
B 地区全景 (南西より)



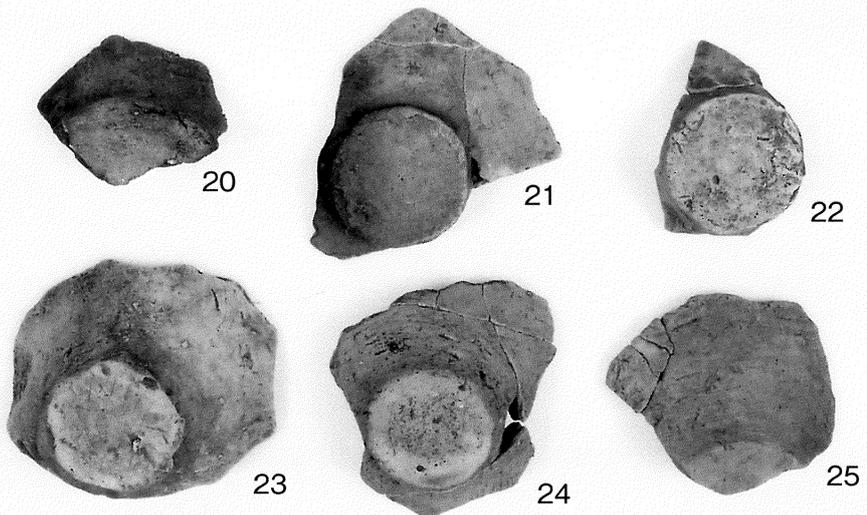
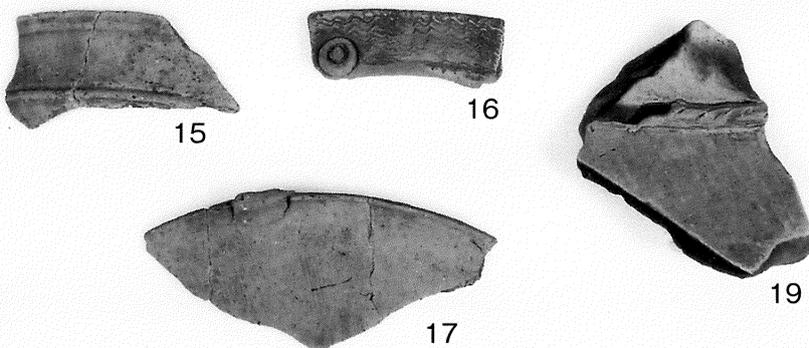
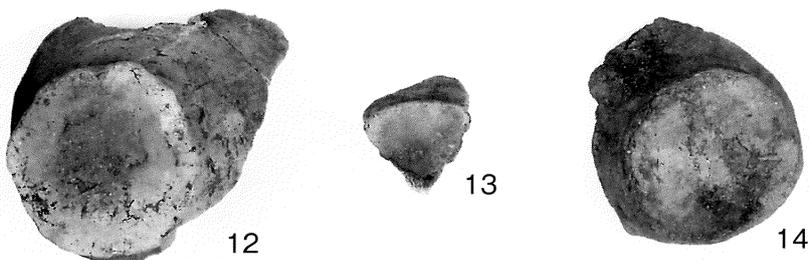
B 地区 土坑 3 (南東より)



B 地区 土坑 3
A - B セクション (北東より)



写真图版 5



C-1 地区 南～東部拡張前
(北東より)



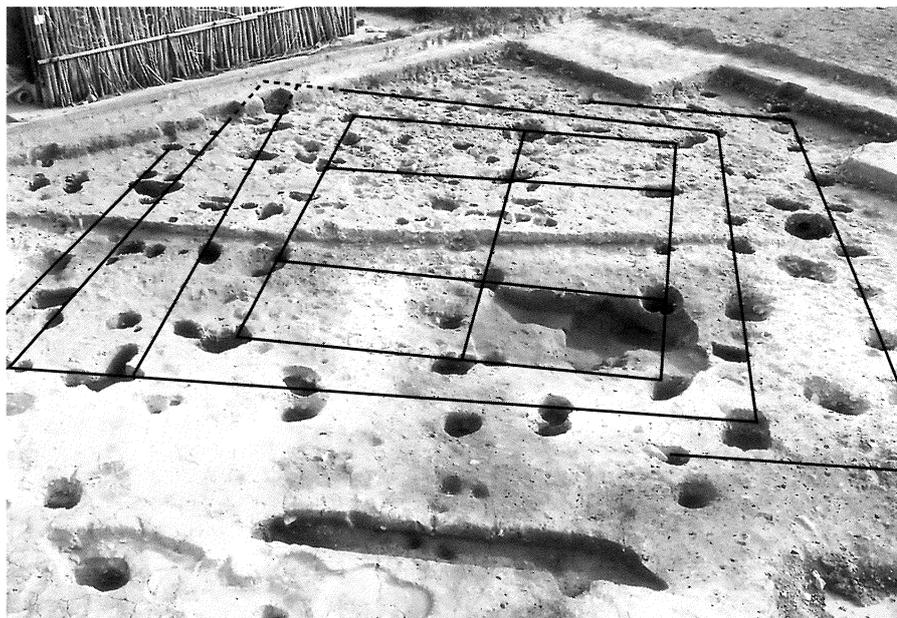
C-1 地区 北部 (南東より)



C-1 地区 土坑 199
遺物出土状況 (南西より)



写真図版 7



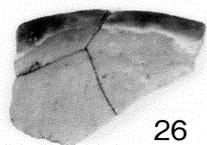
C-1 地区 建物 1 (北より)



C-1 地区 土坑 15
遺物出土状況 (東より)



C-1 地区 土坑 15
遺物出土状況 (西より)



26



27



28



29



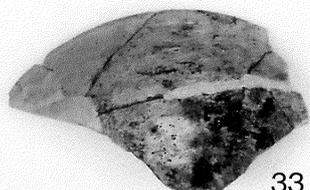
30



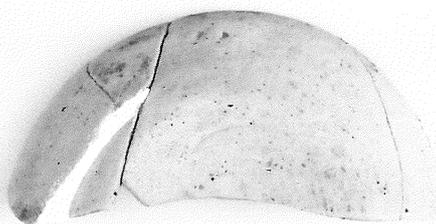
31



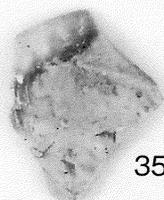
32



33



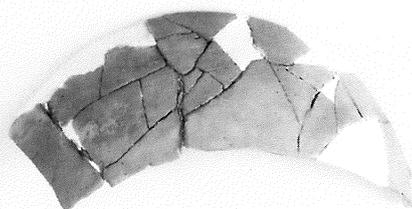
34



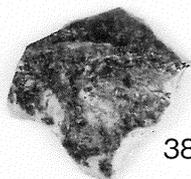
35



36



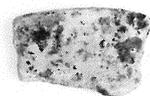
37



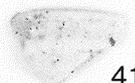
38



39



40



41

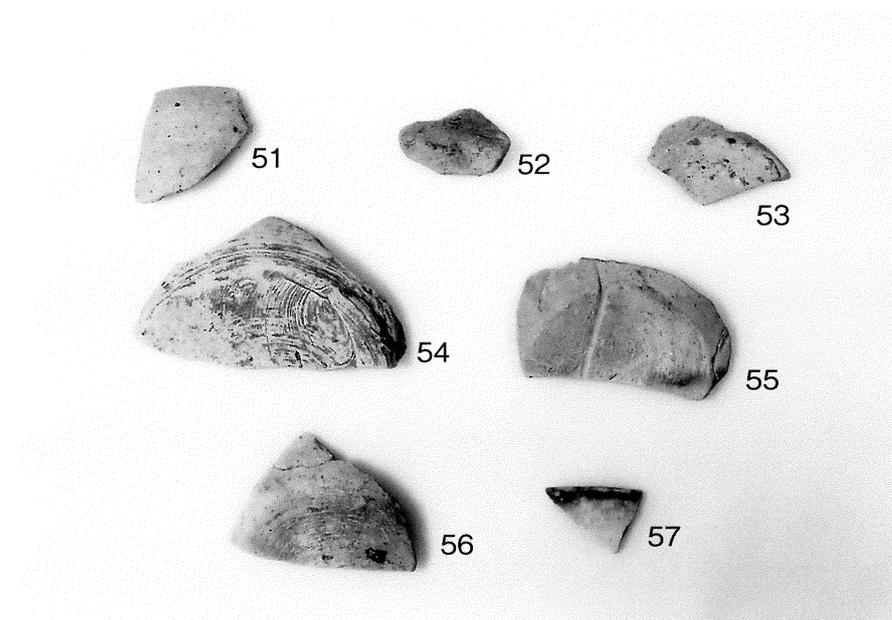
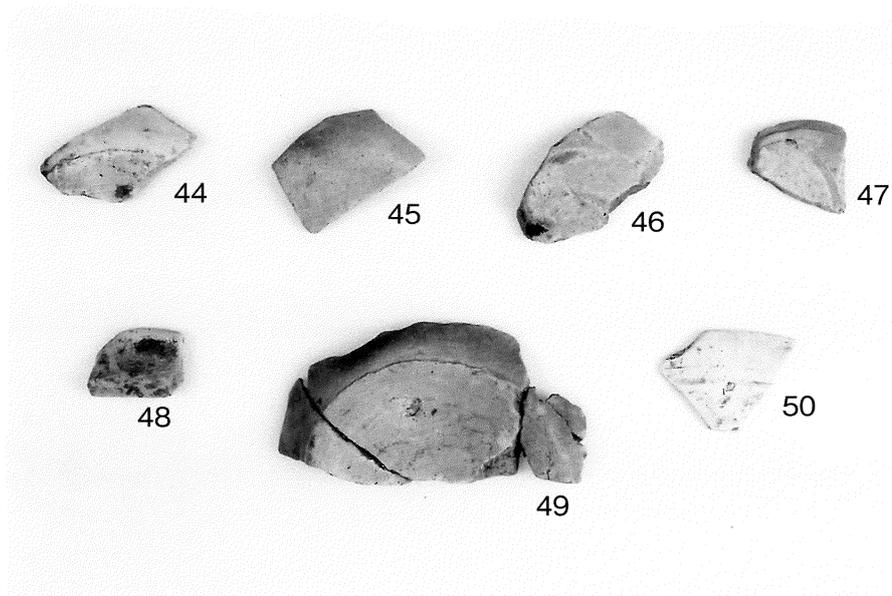


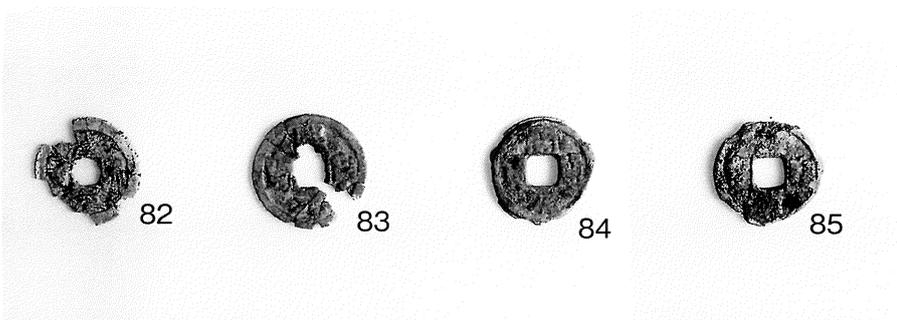
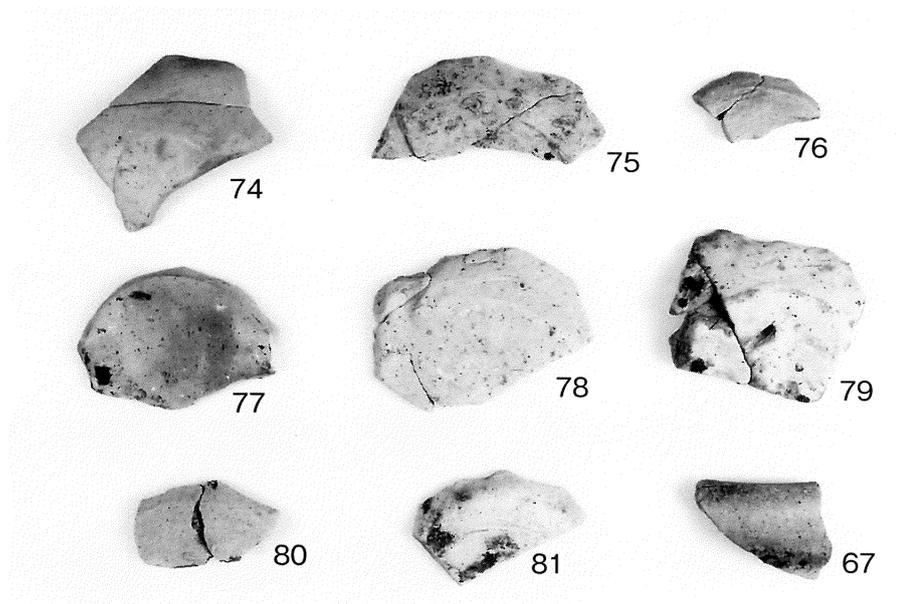
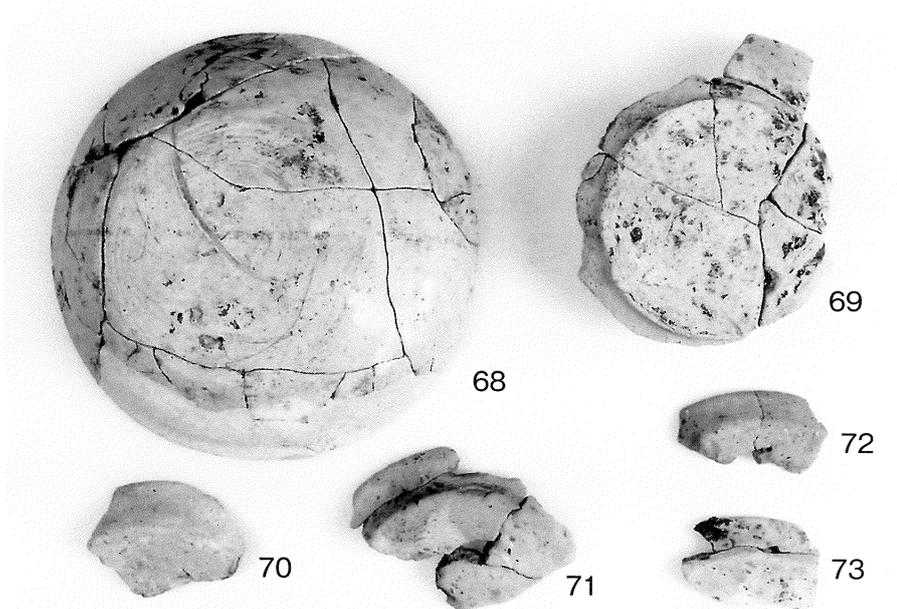
42



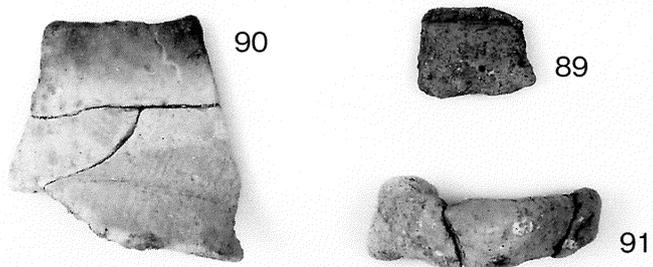
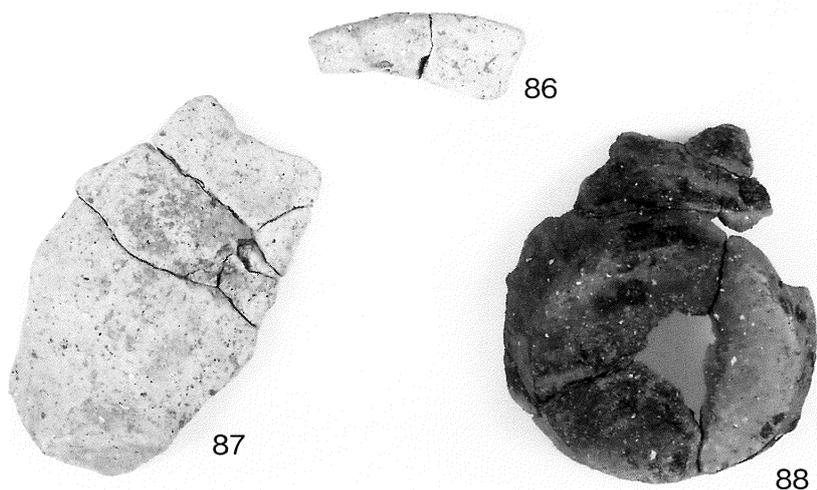
43

写真図版 9





写真図版11





C-2 地区全景 (南東より)



C-2 地区 流路 72
遺物出土状況 (北より)



C-2 地区 流路 38
遺物出土状況 (北東より)

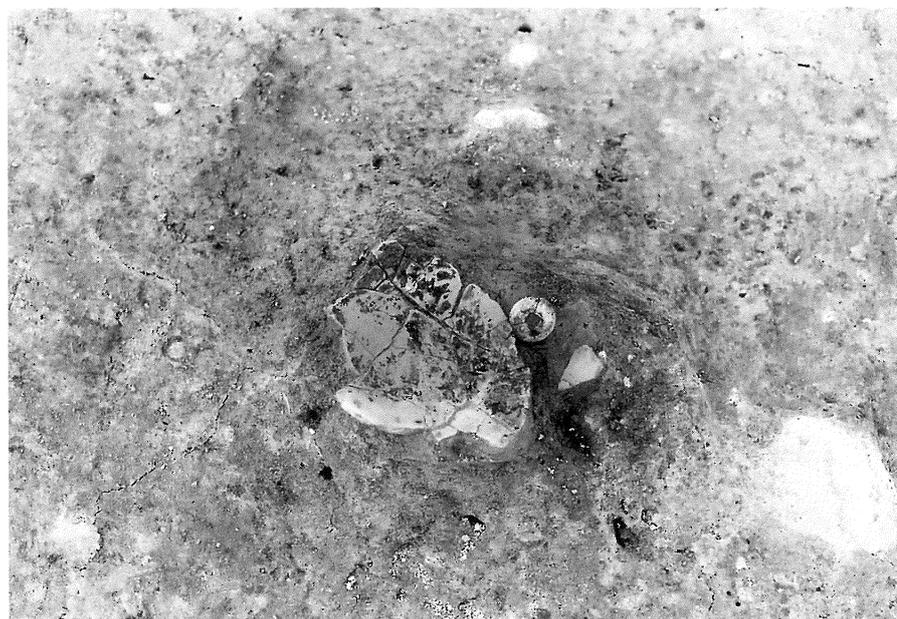
写真図版13



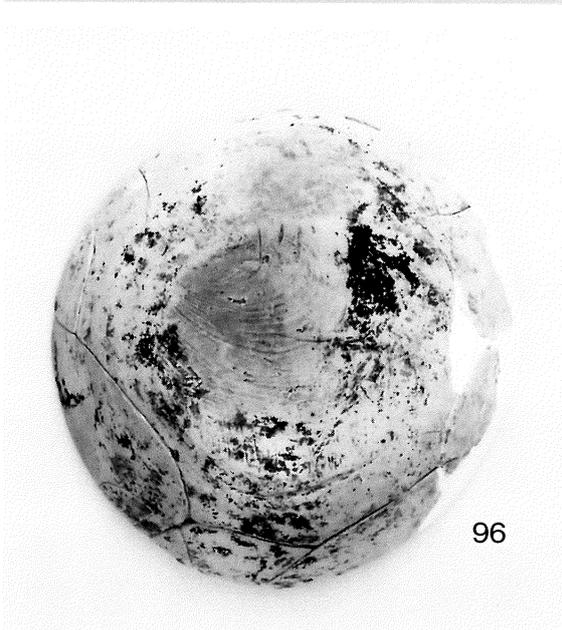
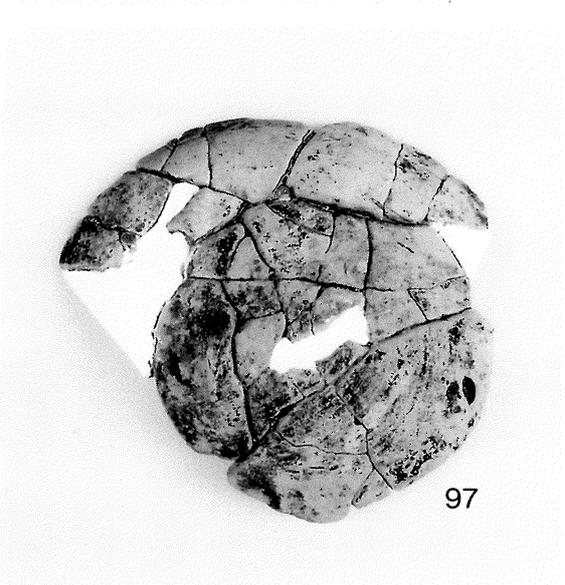
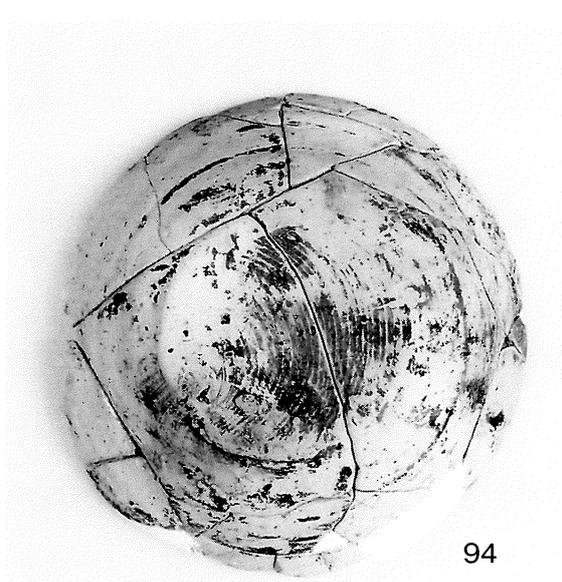
C-2 地区 遺構 18
(土器 1 枚目取上後)
遺物出土状況 (南西より)

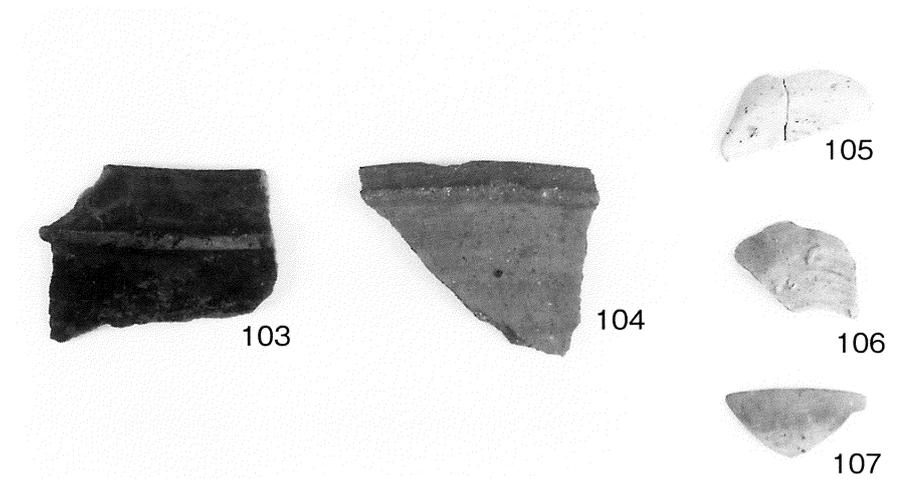
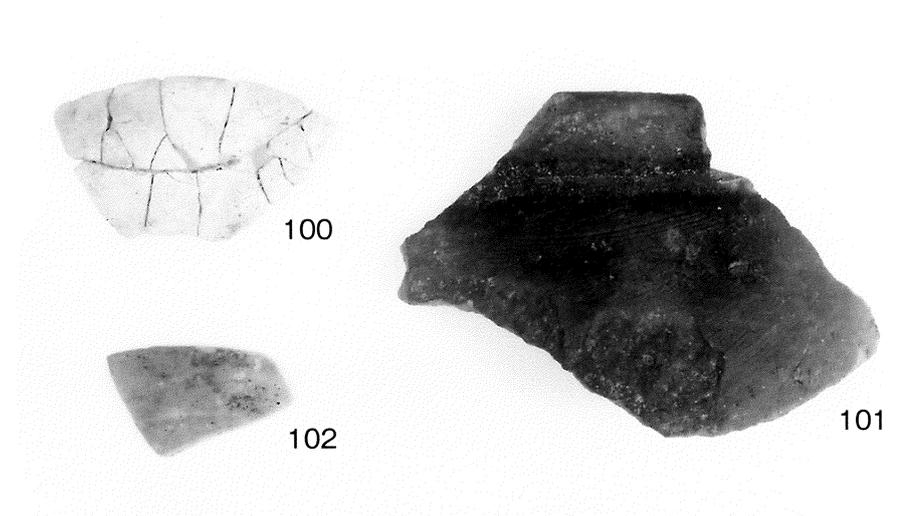
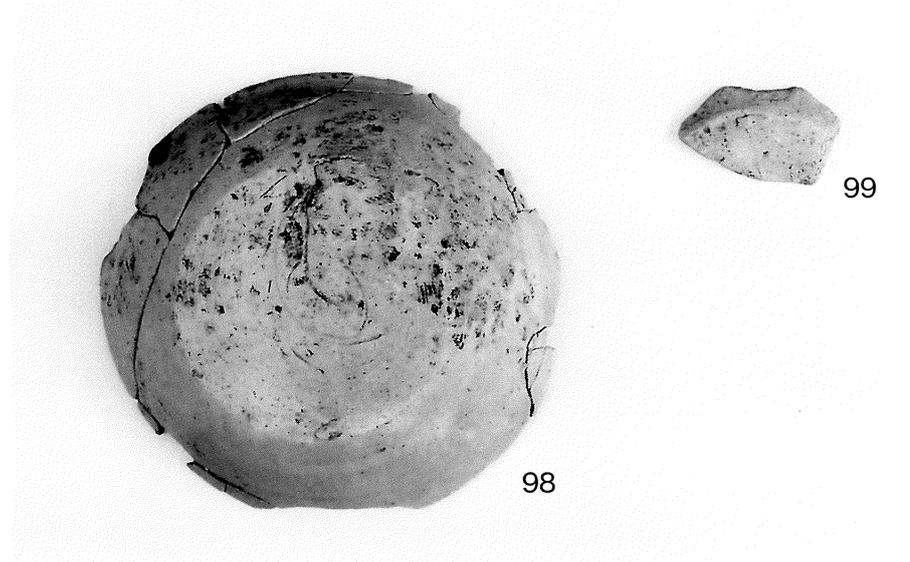
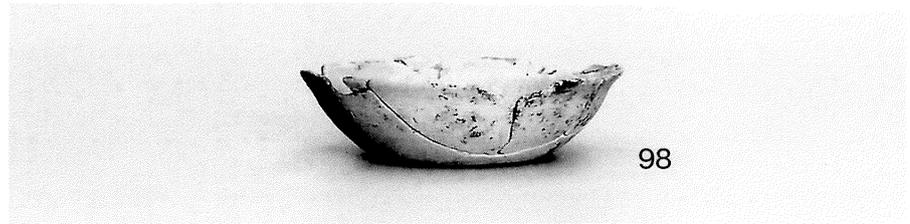


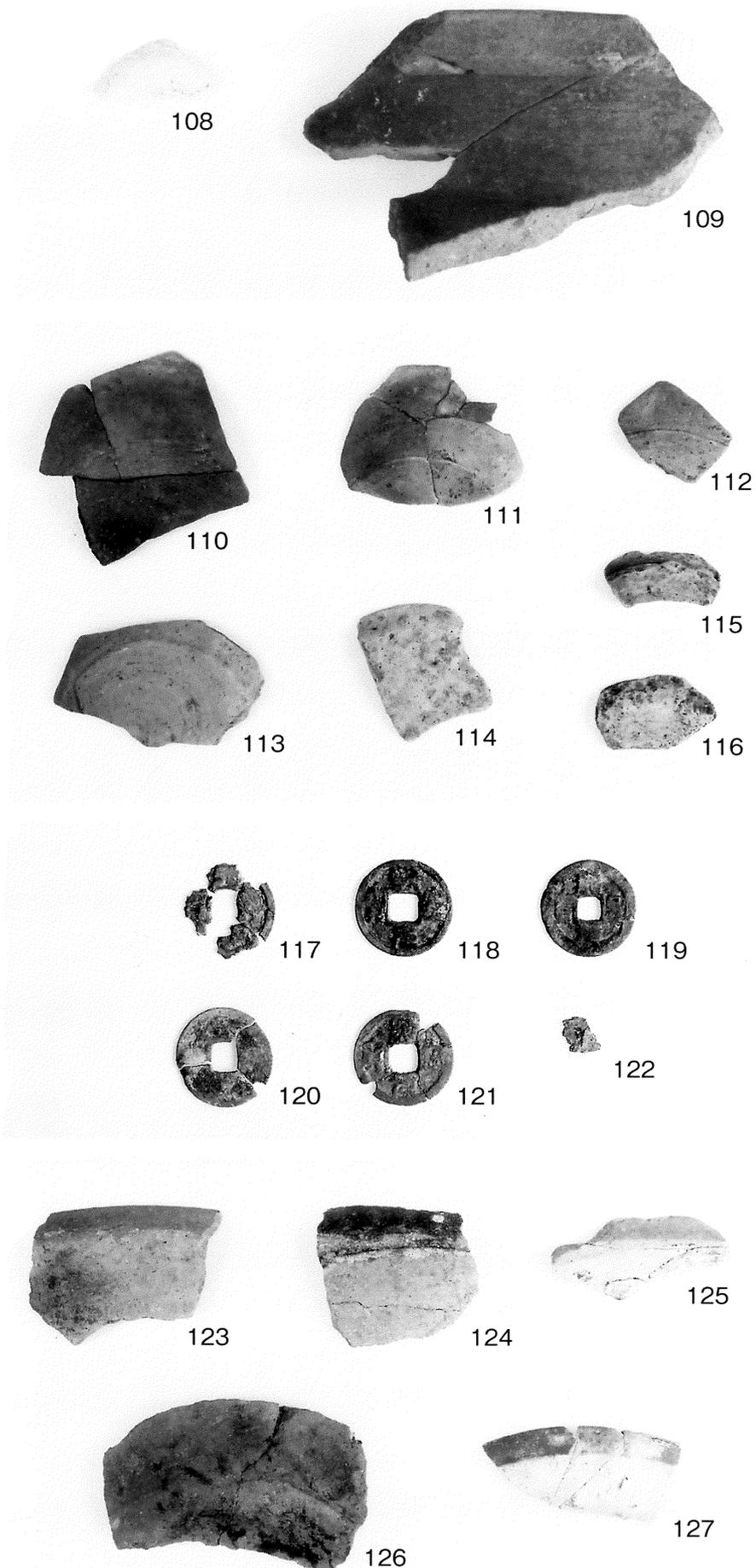
C-2 地区 遺構 18
(土器 2 枚目取上後)
遺物出土状況 (南西より)



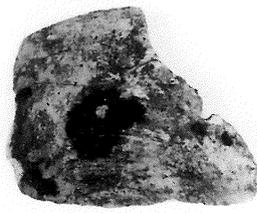
C-2 地区 遺構 18
(土器 4 枚目取上後)
遺物出土状況 (南西より)



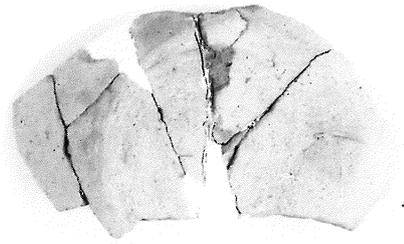




写真图版17



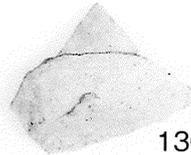
128



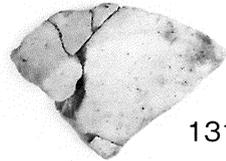
129



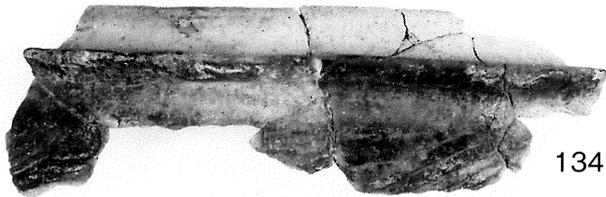
132



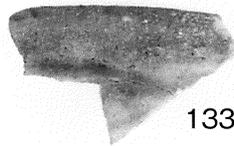
130



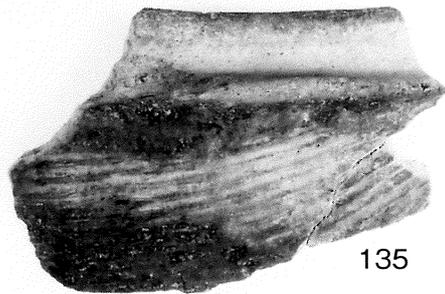
131



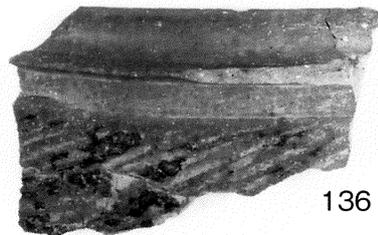
134



133



135



136



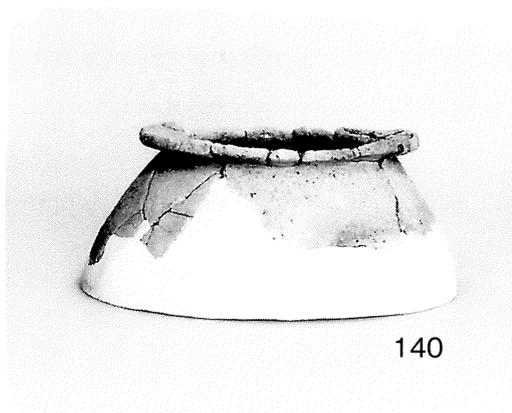
137



138



139



140



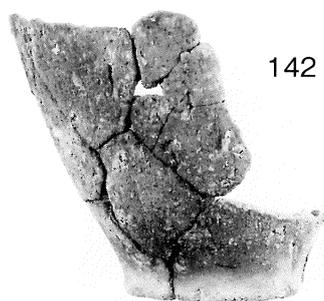
143



141



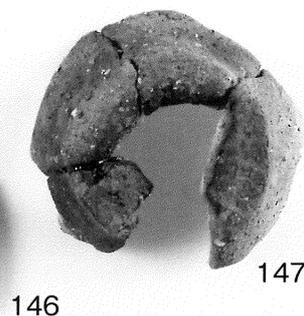
144



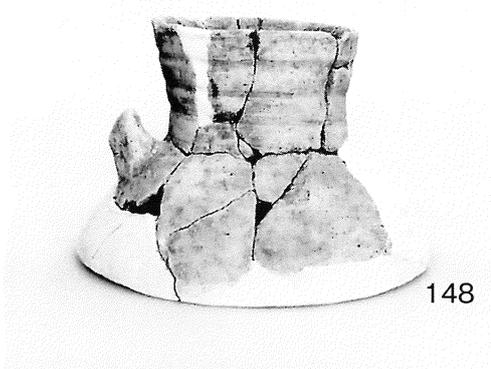
142



145



147



148



149

C-2 地区
出土弥生土器

報告書抄録

ふりがな	たかはぎいせき							
書名	高萩遺跡							
副書名	経営体育成基盤整備事業（大日川東Ⅱ期地区2・4工区工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	南あわじ市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	山崎裕司・坂口弘貢							
編集機関	南あわじ市埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙1100 TEL0799-42-3849							
発行機関	南あわじ市教育委員会							
所在地	〒656-0393 兵庫県南あわじ市湊90番地1 TEL0799-37-3020							
発行年月日	平成23（2011）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかはぎいせき 高萩遺跡	ひょうごけん 兵庫県 みなみ 南あわじ市 かしゅう ふくじ 賀集 福井	28224	970037	34度 15分 12秒	134度 45分 43秒	平成17 (2005)年 12月12日～ 平成18 (2006)年 1月31日	1,170m ²	経営体育成基盤整備事業（大日川東Ⅱ期地区2・4工区工事）に伴う
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
たかはぎいせき 高萩遺跡	集落跡	弥生時代中期～後期中世		竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑・溝		弥生土器 土師器・須恵器 瓦器・陶磁器・古銭		

2011年3月31日発行

高萩遺跡

経営体育成基盤整備事業(大日川東Ⅱ期地区2・4工区工事)
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 南あわじ市教育委員会
編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所
〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙 1100
TEL 0799-42-3849
印刷 真野印刷株式会社
〒656-0435 兵庫県南あわじ市八木立石 53
TEL 0799-42-0008